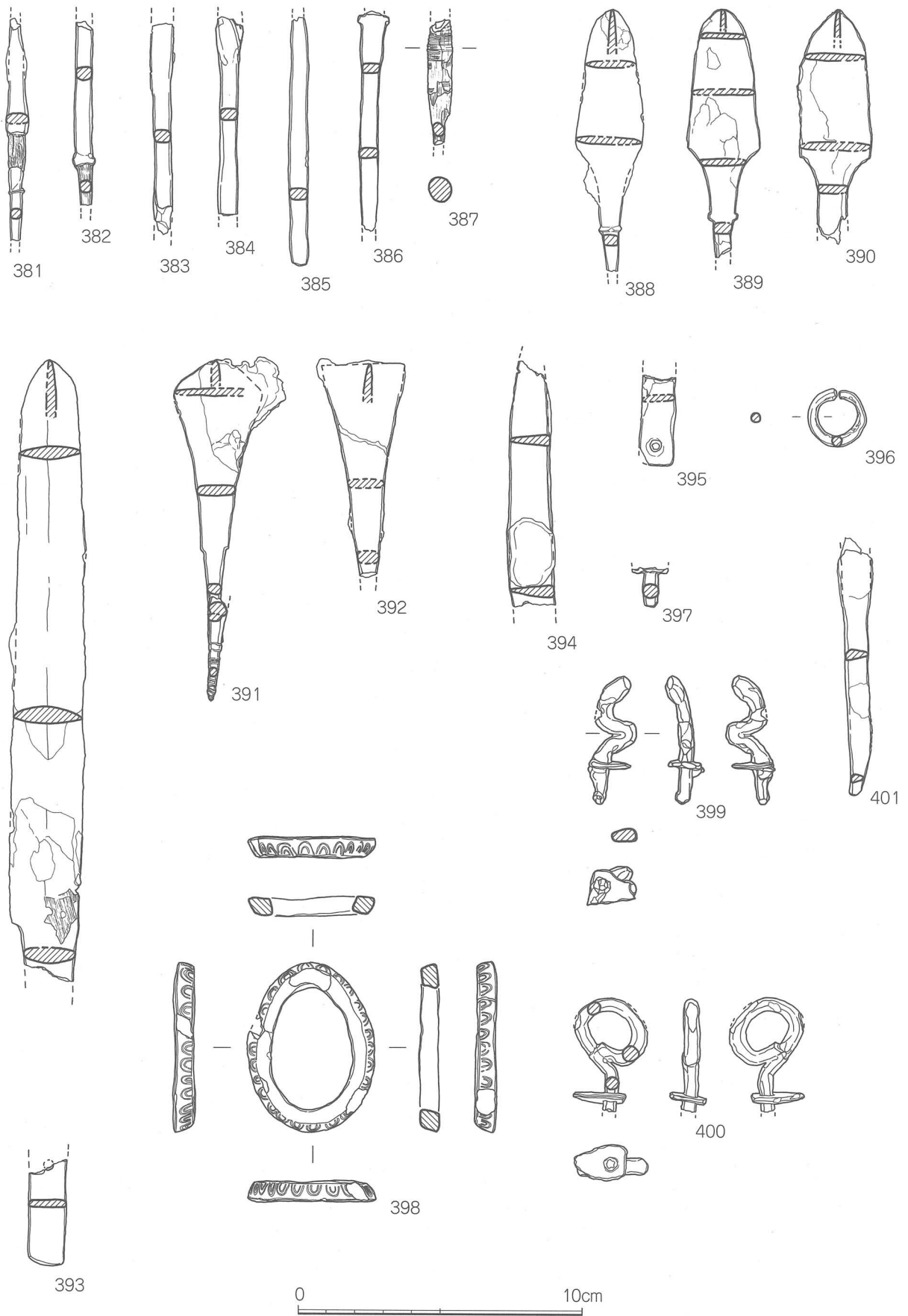


第98図 D区 2号横穴墓内出土土器(2)及び遺物(1)



第99图 D区 2号横穴墓内出土遗物(2)

第31表 D区出土土師器観察表

* () は推定値。

遺物 番号	種別	器種・ 部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
295	須恵器	坏蓋・ 完形	SN1	14.4		4.2	ヘラ削り、 回転ナデ	ヨコナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (7.5Y 6/1)	3mm以下の灰白の砂粒及び2.5mm以下の黒色の砂粒を含む。	墓前祭祀
296	須恵器	坏蓋・ 完形	SN1	14.7		4.5	回転ナデ	回転ナデ	灰 (7.5Y 4/1)	灰 (7.5Y 7/1)	2mm以下の灰色の粒子と微細な粒子を含む。	墓前祭祀。外面に自然釉。
297	須恵器	坏蓋・ 口縁部	SN1の SL1内					ヨコナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	褐灰 (10YR 6/1)	精良。	
298	須恵器	坏身・ 完形	SN1	12.9		4.4	ヘラ削り、 回転ナデ	ヨコナデ	灰 (N 61)	灰 (N 61)	4mm以下の灰白の粒及び2mm以下の黒色の砂粒を含む。	墓前祭祀。外面に自然釉。
299	須恵器	坏身・ 胸部	SN3	(11.6)				ヨコナデ	灰 (7.5Y 5/1)	灰 (7.5Y 5/1)	2mm以下の白色砂粒を含む。	
300	須恵器	坏身・ 胸部		(14.1)				ヨコナデ	灰 (10Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	1mmの赤褐色砂粒と2mm以下の白色砂粒を含む。	表採
301	須恵器	坏身・ 口縁部	SN3					ヨコナデ	灰 (10Y 1/5)		1mm以下の白色砂粒を含む。	
302	須恵器	不明・ 口縁部	SN1					回転ナデ	灰 (5Y 5/1)	灰 (5Y 5/1)	1mm以下の黒色粒を含む。	墓前祭祀。内・外面に自然釉。
303	土師器	壺・ 胸部	SN1の SL1内	16.0				ナデ	橙 (2.5YR 6/8)	褐灰 (10YR 6/3)	3mm以下の灰色と褐色の粒子を多く含む。	風化気味。304と同一体。
304	土師器	壺・ 胸部	SN1の SL1内					一部ハケメ	橙 (2.5YR 6/8)	黒褐 (10YR 3/1)	4~3mm大の褐色の粒子と2.5mm以下の黒色の粒子を含む。	風化気味。内面が黒変。
305	土師器	不明・ 口縁部	SN1の SL1内					ヨコナデ	にぶい黄 (2.5Y 6/3)	黄灰 (2.5Y 4/1)	最大4mm程の石を含んでいる。	
306	土師器	壺・ 頸部	SN1					ヨコナデに貼付突帯文	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	3mm以下の褐色・白色の粒子と黒色透明の光沢粒を含む。	土器か?。307と同一体。風化気味。
307	土師器	壺・ 底部	SN1		8.1			ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	3mm以下の褐色・白色の粒子と黒色透明の光沢粒を含む。	土器か?。風化気味。浅い上げ底。
308	土師器	不明・ 底部	SN1						橙 (5YR 6/6)	黄灰 (2.5Y 4/1)	1mm以下の黒色・透明の光沢粒と3mm以下の赤褐色・黄褐色の粒子を含む。	風化著しい。
309	土師器	壺・ 胸部	SN2の SL2内					ハケメ	明赤褐 (5YR 5/8)	橙 (7.5YR 5/2)	微細~2mm大の黒色の光沢のある粒子と黄褐色の粒子を含む。	風化著しい。
310	土師器	壺・ 口縁部	SN2の SL2内	12.8				ナデ	明黄褐 (10YR 7/6)	黄灰 (2.5Y 6/1)	3mm以下の黒色・灰色・褐色の粒子を含む。	風化気味。
311	土師器	壺・ 底部	SN2の SL2内					ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	暗灰黄 (2.5YR 5/2)	1mm以下の黒色・茶褐色の粒子を多く含む。	底部穿孔。風化著しい。
312	土師器	不明・ 底部	SN2の SL2内					ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	1~6mm大の暗赤褐色と2.5mm以下の黒色・光沢粒、4mm以下の茶褐色・白色不透明の粒子を含む。	外面に煤附着。底部穿孔。
313	土師器	壺・ 胸部	SN2の SL2内			3.6			橙 (7.5YR 7/6)	褐灰 (10YR 5/1)	4mm以下の赤褐色粒、2.5mm以下の黒褐色粒、2mm以下の褐色・黒色粒子を含む。	風化著しい。
314	土師器	壺・ 口縁部	SN2の SL3内	(30.0)				ヨコナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	3mm以下の黒色・灰色・褐色の粒子、2mm以下の黒色・光沢粒を含む。	二重口縁。
315	土師器	壺・ 底部	SN2の SL3内			(6.8)			橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	2mm以下の黒色光沢粒、赤褐色・褐色の粒子を含む。	底部穿孔。風化著しい。
316	土師器	壺・ 頸部	SN3 主体部上					ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	
317	土師器	壺・ 頸部	SN3 主体部上					ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 5/3)	2mm以下の赤褐色の粒子を含む。	外面黒変。
318	土師器	高坏・ 脚部	SN2の SL3内						にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	微細な黒色・白色の粒子を多く含む。	風化著しい。
319	土師器	高坏・ 脚部	SN3 主体部上					ナデ。 ヘラ磨き	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1.5mm以下の褐色の粒子を含む。	
320	土師器	高坏・ 脚部	SN3 主体部上					ナデ。 ヘラ磨き	橙 (7.5YR 6/8)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1mm以下の褐色・白色の粒子を含む。	風化著しい。
321	土師器	高坏・ 脚部	SN3 主体部上					ナデ。 ヘラ磨き	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (10YR 4/1)	1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	風化気味。
322	土師器	高坏・ 脚部	SN3 主体部上					ナデ。 ヘラ磨き	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	微細な赤褐色・黒色の粒子を含む。	
323	土師器	高坏・ 脚部	SN3 主体部上					ナデ。 ヘラ磨き	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	微細な黒色・透明な光沢粒を含む。	
324	土師器	高坏・ 脚部	SN3の SL4内					ナデ。 ヘラ磨き	にぶい橙 (7.5YR 5/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1mm以下の褐色・透明な粒子を含む。	
325	土師器	高坏・ 脚部	SN3の SL4					ナデ。 ヘラ磨き	橙 (5YR 7/8)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1mm以下の褐色粒と黒色の光沢粒を含む。	風化気味。
326	土師器	高坏・ 脚部	SN3の SL4			(11.6)		ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1mm以下の褐色の粒子を含む。	
327	土師器	高坏・ 脚部	SN3の SL4					ナデ。 ヘラ磨き	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1.5mm以下の褐色の粒子を含む。	
328	土師器	高坏・ 脚部	SN3の SL4					ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	0.5mm以下の褐色の粒子を含む。	
329	土師器	壺?・ 口縁部	SN3の SL4	(14.6)				ナデ	灰黄褐 (10YR 5/2)	灰黄褐 (10YR 5/2)	3mm以下の黒色・白色粒と透明な光沢粒を含む。	
330	土師器	壺?・ 頸部	SN3の SL4					ヨコナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	3mm以下の黒色・透明な光沢粒と2mm以下の赤褐色・褐色の粒子を含む。	
331	土師器	壺?・ 頸部	SN3の SL4	(18.0)				ナデ	橙 (5YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1.5mm以下の褐色・白色の粒子と透明な光沢粒を含む。	
332	土師器	壺・ 口縁部	SN3の SL4	(19.8)				ヨコナデ	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 6/6)	3.5mm以下の褐色・黒色・乳白色の粒子と透明な光沢粒を含む。	
333	土師器	不明・ 底部	SN3の SL4			(3.2)		ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 7/6)	2mm以下の黒色・褐色・灰色の粒子と透明・黒色の光沢粒を含む。	
334	土師器	不明・ 底部	SN3の SL4			(8.0)		ヨコナデ	黄灰 (2.5YR 5/1)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3.5mm以下の褐色・褐色・白色の粒子を含む。	
335	土師器	不明・ 底部	SN3の SL4			(4.0)		ヨコナデ	にぶい黄橙 (10Y 5/4)	明褐 (7.5YR 5/6)	2mm以下の黒色光沢粒と褐色粒、3mm以下の灰褐色粒を含む。	
336	土師器	不明・ 底部	SN3の SL4					ナデ	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	3mm以下の灰色の粒子と1.5mm以下の黒色の光沢粒を含む。	

第32表 D区2号横穴墓出土土器観察表

遺物番号	種別	器種・部位	法量 (cm)				手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
			口径	底径	器高	器高	外面	内面	外面	内面		
337	須恵器	坏蓋	13.0		3.9		1/3ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (N5/)	オリーフ灰 (2.5YG 5/1)	5mm以下の白色粒・1mmの灰色・赤褐色粒を含む。	ヘラ記号
338	須恵器	坏蓋	13.7		4.5		ヘラ切り・ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 5/)	2mm以下の灰白色粒を含む。	ヘラ記号
339	須恵器	坏蓋	12.4		4.3		ヘラ切り・ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	褐灰 (7.5YR 5/1)	緑灰 (7.5GY 5/1)	3mm以下の灰色粒・1mm以下の黒褐色粒を含む。	
340	須恵器	坏身	12.8		3.8	受部径 15.6	2/3ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (7.5Y 6/1)	灰 (10Y 6/1)	2.5mm以下の黒色粒・3mm以下の灰白色粒を含む。	口縁端部に1条・受部に2条の沈線が巡る。
341	須恵器	坏身	11.5		4.0	受部径 14.5	ヘラ切り・ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (N 6/)	灰 (N 5/)	3mm以下の灰白色粒・1mm以下の黒褐色粒を含む。	受部に1条の沈線が巡る。
342	須恵器	坏身	11.0		4.1	受部径 13.6	2/3ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (N 5/)	灰 (N 4/)	2mm以下の灰白色粒を含む。	ヘラ記号
343	須恵器	壺蓋	10.0		3.4		2/3ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白 (N 7/)	灰白 (5Y 7/1)	1mm以下の灰白色・黒色粒を含む。	灰かぶり・自然釉
344	須恵器	壺蓋	10.0		3.2		2/3ヘラケズリ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白 (7.5Y 7/1)	灰白 (5Y 7/2)	2mm以下の黒色粒を含む。	外面に鉄分が少量付着。
345	須恵器	壺	8.2		8.6	頸部径 15.0	回転ヨコナデ・かき目・ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰白 (7.5Y 7/1)	灰白 (7.5Y 7/1)	2mm以下の黒色粒を含む。	
346	須恵器	壺	6.5	4.9	6.3	最大径 11.0	回転ヨコナデ・ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰 (10Y 5/1)	灰 (N 5/)	5.5mm以下の灰白色粒を含む。	
347	須恵器	壺	6.9		9.7	最大径 13.6	回転ヨコナデ・ 底部1/3ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰 (N 5/)	灰 (N 5/)	4mm以下の灰白色粒を含む。	自然釉が付着。
348	須恵器	提瓶	4.7		14.6	最大径 14.0	回転ヨコナデ・口頸部・ 体部にカキ目	回転ヨコナデ	灰白 (N 7/)	灰白 (10Y 7/1)	4mm以下の灰白色粒を含む。	肩部にボタン状の把手が付く。
349	須恵器	甕/ 口頸部? 底部?			残存高 12.0	9.0	体部下半をヘラケズリ・ 回転ヨコナデ・肩部に2条の沈線	回転ヨコナデ	灰白 (2.5Y 7/1)	灰黄 (2.5Y 7/2)	1.5mm以下の乳白色粒・微細な黒色?灰色粒を含む。	
350	須恵器	高坏	11.9	11.8	17.0	基部径 3.6	回転ヨコナデ・肩部にかき目・ 頸部に平行タタキ	回転ヨコナデ	灰 (N 6/1)	灰 (N 6/)	4mm以下の灰白色粒を含む。	方形二段三方スカシ
351	須恵器	脚付 長頸壺	11.3	15.3	30.4	胴部径 17.6	回転ヨコナデ・肩部にかき目・ 胴部に平行タタキ	回転ヨコナデ	灰(5Y 5/1)? 黒(7.5Y 2/1)	灰 (7.5Y 4/1)	2mm以下の灰色粒を含む。	方形二段三方スカシ・灰かぶり・すざ痕跡
352	須恵器	甕/ 口頸部? 肩部?	21.8		残存 8.5	頸部径 17.2	回転ヨコナデ・ 平行タタキ	回転ヨコナデ 同心円タタキ	灰黄 (2.5Y 6/2)	灰黄 (2.5Y 6/2)	2mm以下の灰色・1mm以下の黒色粒を含む。	自然釉
353	土師器	坏(マリ)	15.7		7.3		ヨコナデ	ヨコナデ・ ヘラミガキ	橙 (7.5YR 7/6)	黄赤 (7.5R 7/8)? 赤褐 (5YR 4/8)	3mm以下の赤褐色粒を含む。	一部に赤色顔料が残存。
354	土師器	坏(マリ)	13.0		6.2		ヨコナデ・ ヘラミガキ	ヨコナデ・ ヘラミガキ	明赤褐 (2.5Y 5/6)	黄 (5Y 6/8)? 明赤褐 (2.5R 5/8)	3mm以下の赤褐色粒・1.5mm以下の灰褐色粒・黒色粒を含む。	全体的に風化が著しい。
355	土師器	坏(マリ)	10.0		5.0		ヨコナデ・ ヘラミガキ	ヨコナデ・ ヘラミガキ	橙 (2.5YR 6/6)	橙 (2.5YR 6/6)	1mm以下の赤褐色粒・灰白色粒を含む。	

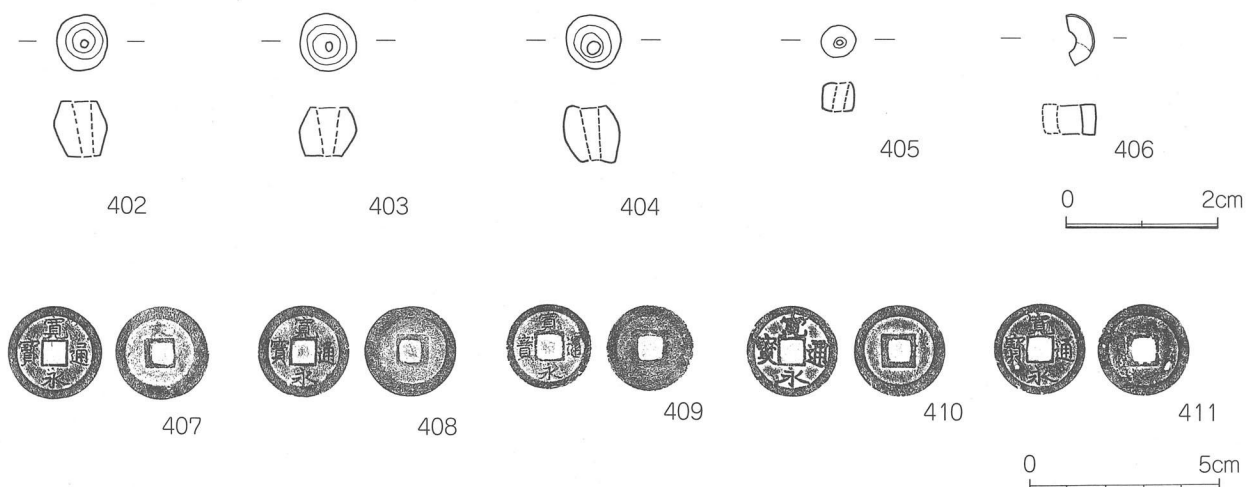
第33表 2号横穴墓出鉄鍬観察表

* () は推定値。

遺物番号	器種	型式	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	刃部厚(cm)	頸部厚(cm)	茎部厚(cm)	重量(g)	備考
356	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(13.95)	1.3	0.3	0.4	(0.4)	(8.7)	
357	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(13.7)	1.35	0.28	0.55	(0.35)	(10.7)	
358	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(13.1)	(1.15)	(0.4)	(0.45)	(0.4)	(10.0)	
359	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(11.05)	(1.3)	(0.3)	(0.45)	(0.4)	(7.5)	
360	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(10.35)	(1.2)	(0.3)	(0.55)	(0.6)	(8.2)	
361	鉄族	長頸鍬	鍬身～茎部	(9.7)	(1.3)		(0.6)	(0.5)		
362	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(11.1)	1.2	0.35	(0.45)		(8.3)	
363	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(11.55)	1.05	0.35	(0.5)		(9.5)	
364	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(10.5)	1.3	(0.35)	(0.5)		(7.8)	
365	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(7.1)	1.1	0.25	(0.45)		(5.1)	
366	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(7.35)	(1.0)	(0.35)	(0.4)		(3.9)	
367	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(6.4)	(1.2)	(0.5)	(0.6)		(5.7)	
368	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(5.45)	(1.75)	(0.35)	(0.4)		(5.2)	
369	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(5.5)	(1.3)	(0.3)	(0.5)		(5.4)	
370	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(5.2)	(1.15)	(0.25)	(0.4)		(4.7)	
371	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(4.5)	(1.15)	0.3	(0.3)		(2.1)	
372	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(4.2)	(1.25)	(0.3)	(0.3)		(2.2)	
373	鉄族	長頸鍬	鍬身～頸部	(3.5)	(1.3)	(0.2)	(0.5)		(2.5)	
374	鉄族	長頸鍬	鍬身	(2.9)	(1.2)	(0.2)			(1.3)	
375	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(6.4)	(0.8)		(0.35)	(0.4)	(3.1)	
376	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(7.0)	(1.0)		(0.4)	0.45	(5.7)	
377	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(5.8)	(0.8)		(0.5)	(0.35)	(4.7)	
378	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(9.6)	(1.0)		(0.5)	(0.4)	(8.0)	
379	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(7.65)	(0.7)		(0.4)	(0.35)	(4.8)	
380	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(14.3)	(1.0)		(0.4)	0.45	(11.7)	茎部に木質残存
381	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(7.9)	(0.8)		(0.3)	(0.55)	(4.7)	茎部に木質残存
382	鉄族	長頸鍬	頸部～茎部	(6.5)	(0.85)		(0.4)	(0.35)	(3.2)	茎部に木質残存
383	鉄族	長頸鍬	頸部	(7.5)	(0.9)		(0.6)		(4.7)	
384	鉄族	長頸鍬	頸部	(7.1)	(1.0)		(0.5)		(6.0)	
385	鉄族	長頸鍬	茎部	(8.9)	(0.75)			(0.45)	(5.7)	
386	鉄族	長頸鍬	頸部	(7.8)	(1.1)		(0.65)		(5.5)	
387	鉄族	不明	茎部	(4.6)	(0.9)			(0.9)	(4.8)	木質残存
388	鉄族	柳葉鍬	鍬身～茎部	(9.3)	(2.4)	0.3		(0.4)	(10.7)	
389	鉄族	柳葉鍬	鍬身～茎部	(8.8)	2.55	0.25	0.4	(0.45)	(11.0)	
390	鉄族	柳葉鍬	鍬身～茎部	(7.6)	2.6	0.35	(0.35)		(12.8)	
391	鉄族	方頭鍬	鍬身～茎部	(7.8)	3.2	(0.3)		(0.65)	(15.5)	
392	鉄族	圭頭鍬	完形	9.95	(3.1)	0.35	0.35	0.35	(18.9)	茎部に樹皮残存

第34表 2号横穴墓出土鉄製品観察表

遺物番号	器種	部位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
393	鉄剣		(26.0)	(2.6)	刃部 (0.6) 茎部 (0.6)	(65.2)	木質残存・目釘孔有り
394	刀子	刃部	(8.8)	(1.6)	(0.45)	(14.4)	
395	不明	茎部	(3.25)	(1.3)	(0.25)	(3.2)	目釘孔有り?
396	耳輪		(2.1)	(0.35)	(0.4)	(2.5)	内側に金銅残存
397	不明		(1.45)	(1.3)	(0.5)	(0.9)	
398	不明		長径 6.0 短径 4.5	0.9		16.9	
399	不明		(4.6)	(1.55)	(1.15)	(4.7)	
400	不明		(4.0)	(2.60)	(0.60)	(5.8)	
401	不明		(9.2)	(1.30)	(0.40)	(5.4)	



第100図 D区 2号横穴墓内出土遺物(3)及び出土古銭

第35表 2号横穴墓出土装身具計測表

(単位: mm、g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
402	菅玉	水晶	透明	8	7	2.5~1	0.5	
403	菅玉	水晶	透明	9	8	3.5~1	0.5	
404	菅玉	水晶	透明	8	7.5	3~1.5	0.1以下	
405	菅玉	ガラス	緑	5	4	2~1	0.1以下	
406	菅玉	ガラス	青	7	—	3.5	0.1以下	

第36表 D区出土古銭計測表

番号	銭名	出土地点	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考
407	寛永通宝	表採	2.45	1.25	0.60	3.00	
408	寛永通宝	表採	2.50	1.38	0.60	3.60	
409	寛永通宝	表採	2.40	1.00	0.65	1.80	
410	寛永通宝	表採	2.30	1.11	0.70	2.00	
411	寛永通宝	表採	2.40	1.15	0.60	2.80	

第5節 E・F区の調査

1. 調査の概要（第101～104図）

E・F区は、調査区の南部に位置する。調査前までは住宅地であり、E区には江戸時代には寺があったとの伝承があった。E区では、井戸跡とその排水のための溝、ピット群が検出された。また近世・近代の瓦が多数出土した。ピット群については、E区は近世から現代までの生活面であり、ピット群の中からも近世以降の遺物が出土しているが、中世以前の遺構・遺物は確認できなかった。井戸跡も最近まで使用していたとの地元の方の話があった。F区では、土坑とピット群が検出された。土坑の中からは空風輪1点とガラス瓶が出土した。ピット群は、埋土中から遺物も出土せず時期は不明であり、建物跡の柱穴として並ばなかった。住居の移転の終了後、数ヵ所にトレンチを入れたところ、古墳時代の土師器の壺が1点出土した（第103図）。またSY1の入り口近くから土師器の甕が1点出土した（第104図）。土坑などの遺構は確認できなかった。

2. 遺構と遺物

（1）祭祀状遺構（第105図）

E区とF区の境に近い位置にトレンチを入れ遺構確認を行ったところ、完形に近い土師器の坏5点と小皿3点、形状が楕円形で大きさが約10cmほどの河原石が4点並んだ状態で出土した。破片も数点出土した。同じレベルにそれぞれが並べられている状態であった。土坑などの遺構は確認できなかった。近世の墓石と、「通林神社」と陰刻された墓石が片づけられた状態で検出されており、この場所に神社などが存在したことが考えられ、それに関連する遺構と考えられる。

（2）土坑（第106～110図）

F区では、土坑を5基検出した。5基とも黄橙色の土に地山の礫が入り込んだ土のみで埋められていた。遺物は空風輪とガラスなどが出土した。時期的には新しいものである。なお、近くで近世墓が確認されており、この近世墓と関連する土坑とも考えられる。

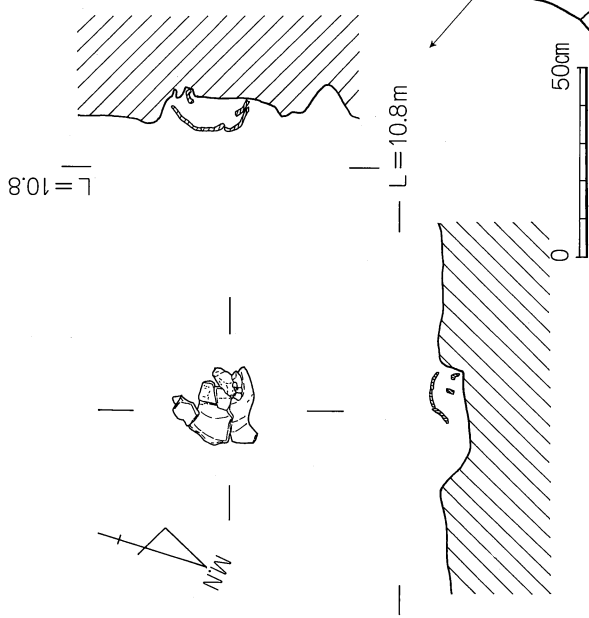
1号土坑（SC1）は長径0.85m、短径0.46mの楕円形プランを呈し、深さ0.25mを測る。遺物として瓦の破片が出土した。

2号土坑（SC2）は長径1.32m、短径0.7mの楕円形プランを呈し、中央部で長径0.32m、短径0.28mの不整形の円形プランを呈する落ち込みがみられる。深さは落ち込みの部分で0.34m、その他の床面で0.35mを測る。遺物は出土しなかった。

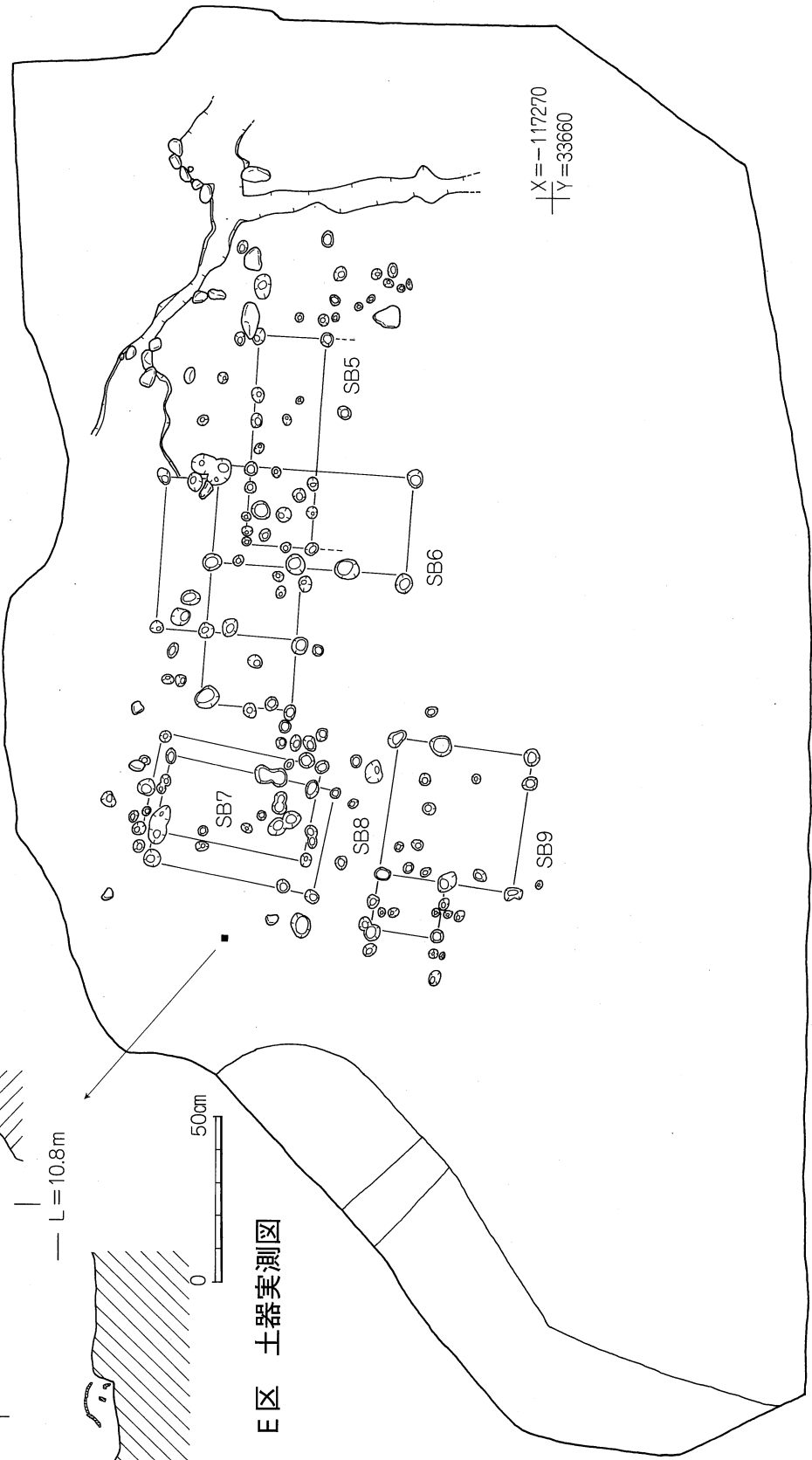
3号土坑（SC3）は長径1.37m、短径1.07mの不整形の楕円形プランを呈し、深さ0.2mを測る。遺物として石や瓦片が出土した。

4号土坑（SC4）は半径0.8mの円形プランを呈し、深さ0.16mを測る。遺物としてガラス瓶や瓦片が出土した。

5号土坑（SC5）は長径1.25m、短径1.1mの楕円形プランを呈し、ほぼ中央から西側の壁側で不整形な落ち込みがみられる。深さは落ち込みの部分で0.48m、その他の床面で0.25mを測る。遺物としてガラス瓶や瓦片が出土した。

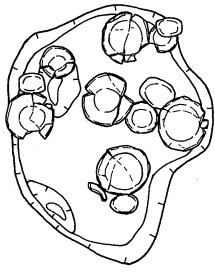


第104图 E区 土器实测图

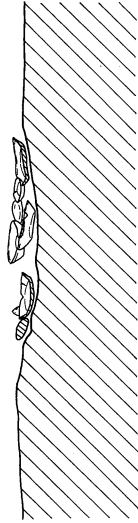


第101图 E区 遺構分布图

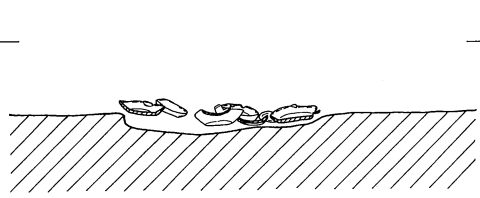
M.N



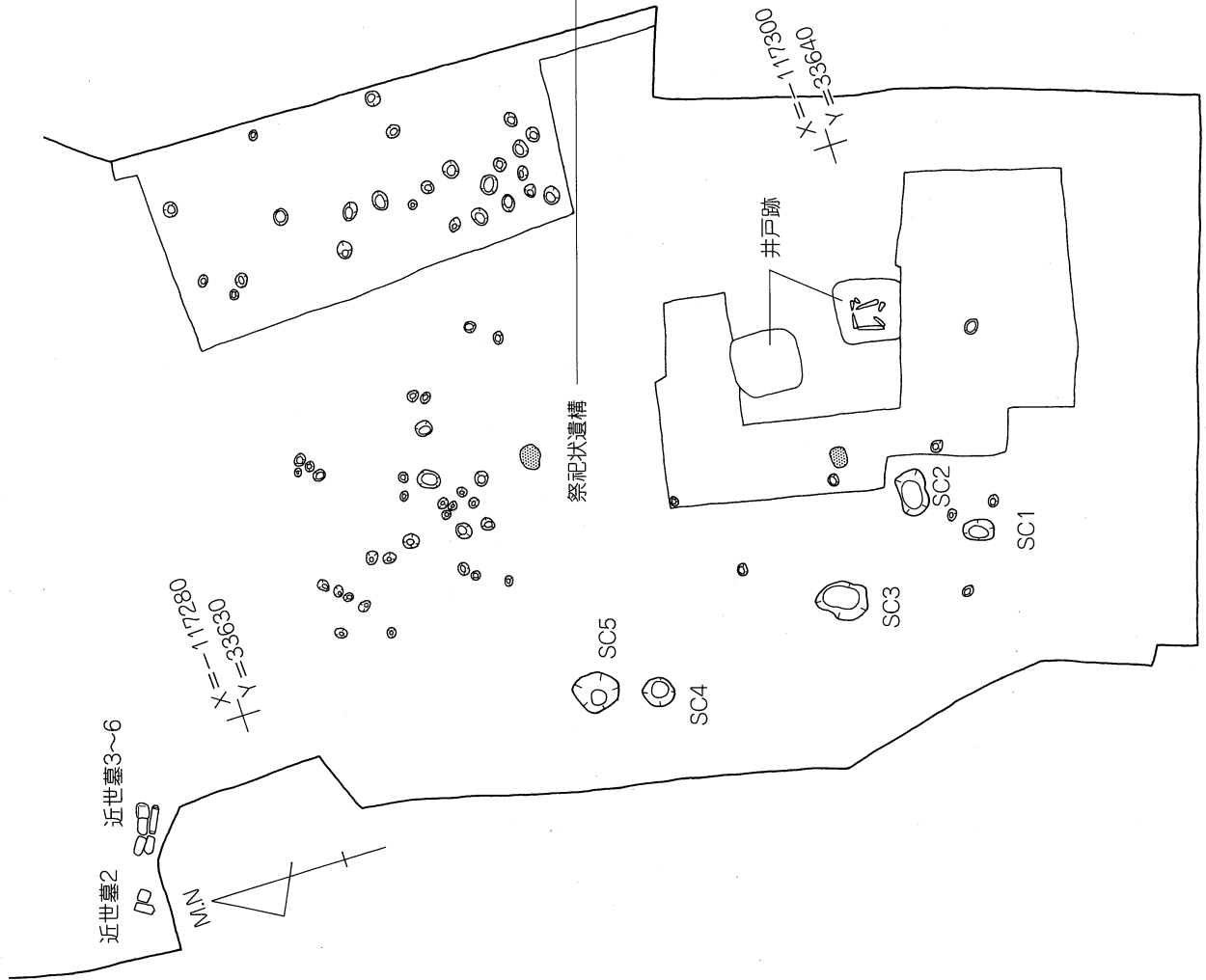
L = 11.2m



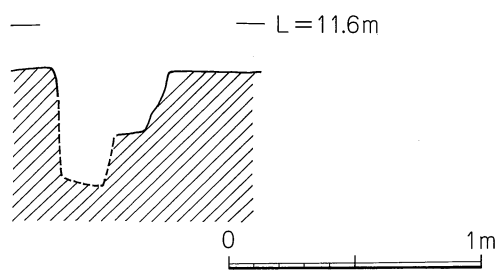
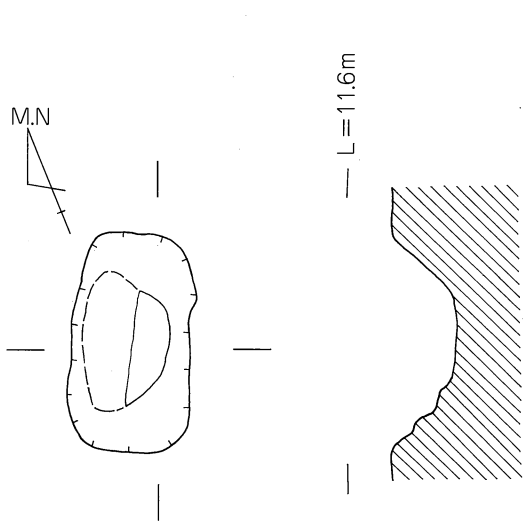
第105图 F区 祭祀状遺構実測図



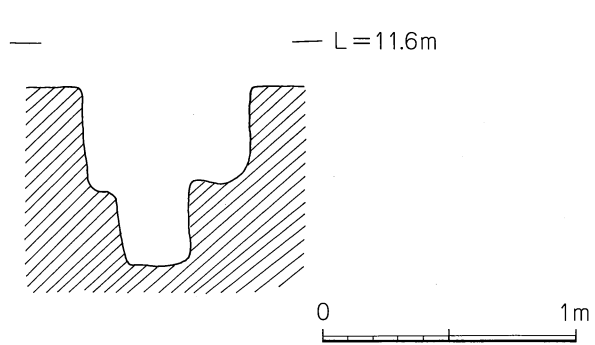
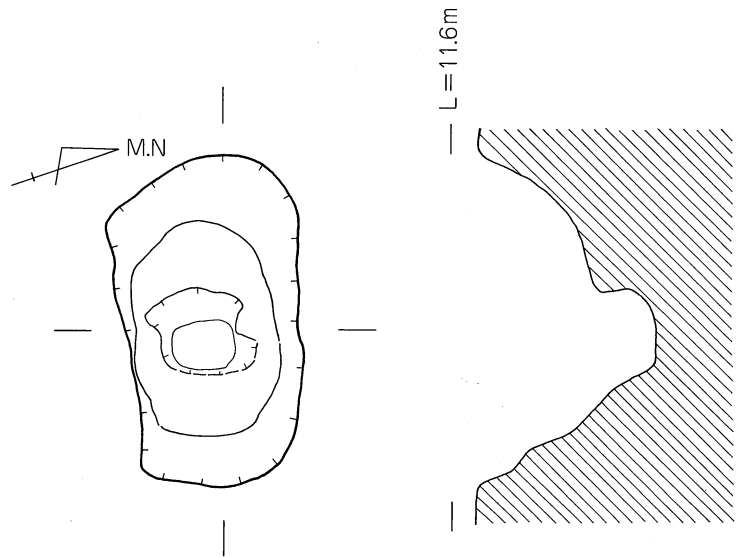
L = 11.2m



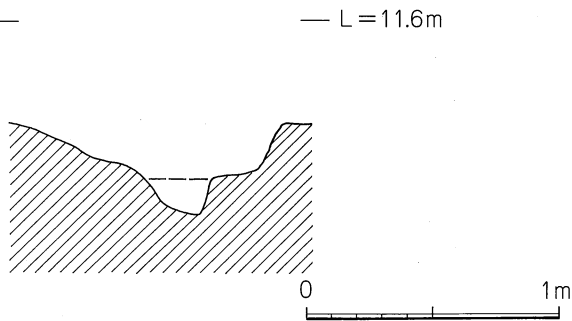
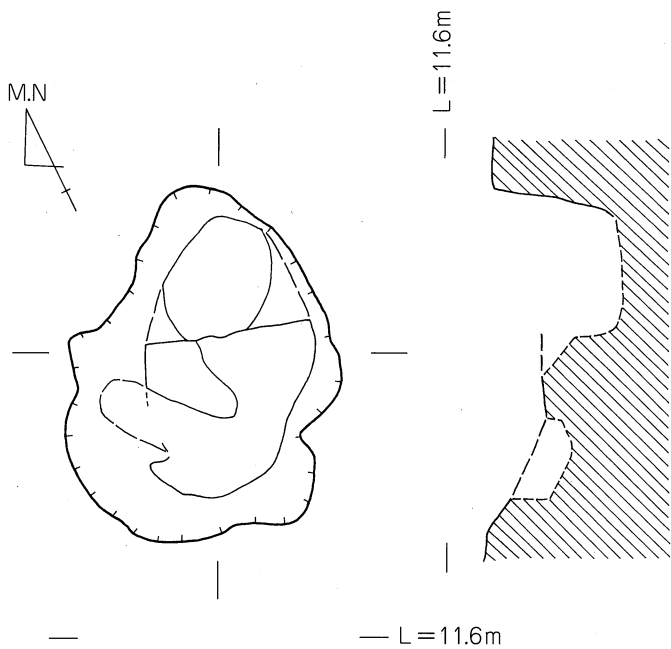
第102图 F区 遺構分布図



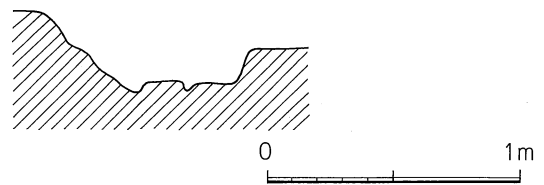
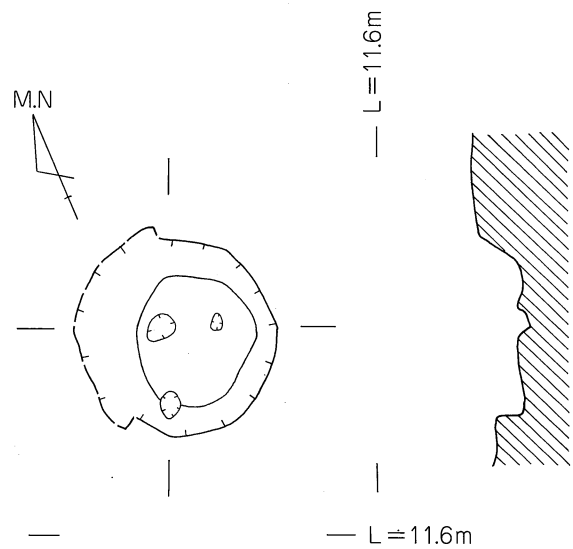
第106图 F区 SC 1 实测图



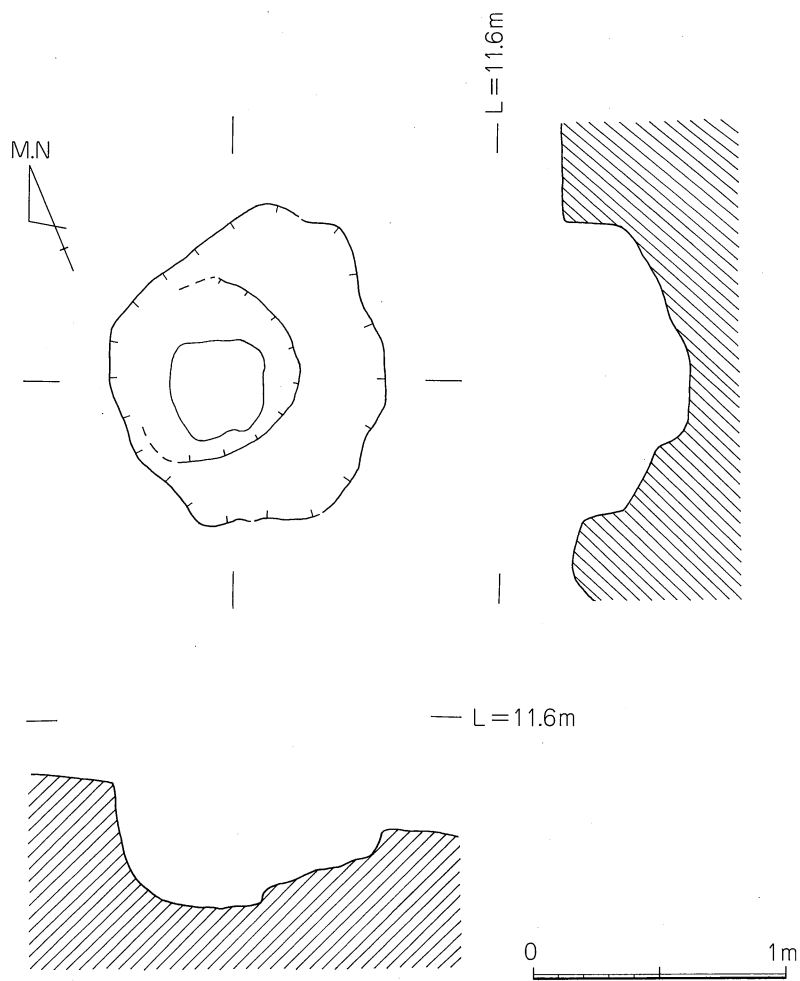
第107图 F区 SC 2 实测图



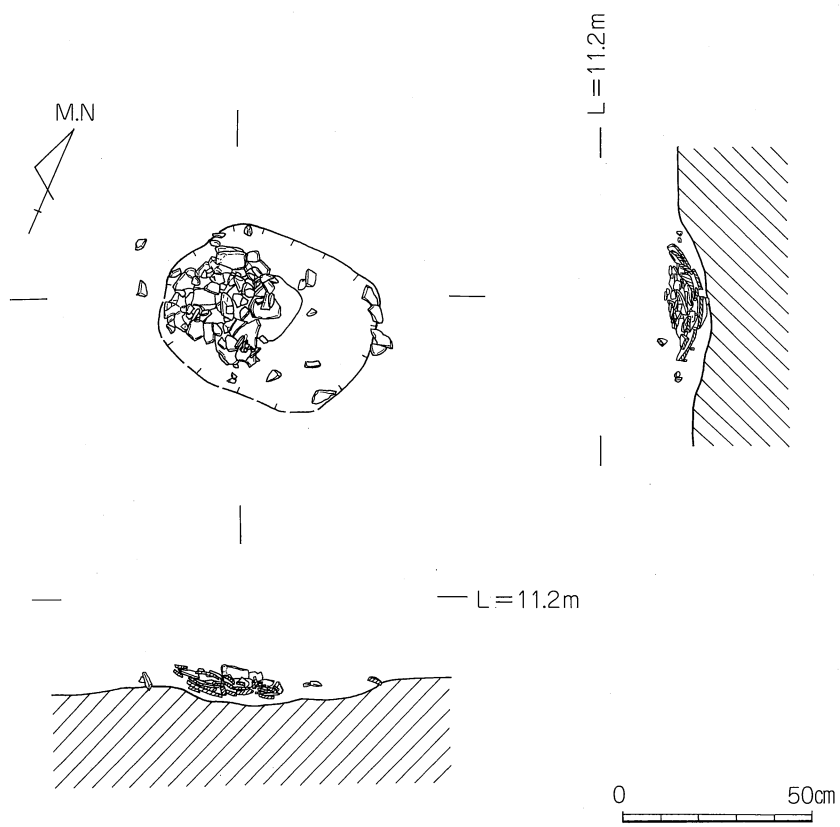
第108图 F区 SC 3 实测图



第109图 F区 SC 4 实测图



第110図 SC 5 実測図



第103図 F区 土師器出土状況

(3) 掘立柱建物跡 (第101図)

E区では約130個にのぼるピットが検出され、そのうち建物跡として捉えられることができたのは5棟である。これらはほとんど南北を主軸とするものである。掘立柱建物跡の上層に包含層はなく、柱穴からも遺物は出土していないため、時期を特定できない。この場所には調査前まで家屋が建ち、戦後に家屋が建てられていたとの地元の方の話があった。また礎石と思われる大型の石が検出されたが、家屋の取り壊しの影響を受けており、原位置から移動している。表採として近世以降の陶磁器や瓦などがあり、近世に寺院があったとの地元での伝承があることから、近世以降から現代までの性格のものと推定される。

(4) 近世墓 (第111～116図)

F区から東へ約8mの地点に近世墓が1基立っていた。またE区とF区の境目の西端から台石をひっくり返し、その横に上向きに置かれた状態の近世墓1基と、さらに近世墓4基と台石1基が重ねられた状態で検出された。何らかの理由で撤去されその場所に置かれたものと考えられる。全て凝灰岩製である。

近世墓1は、高さ81.4cm、幅30.4cm、厚さ20cmの本体と幅29.5cm、奥行き30.3cm、高さ10cmの台石である。本体は位牌形で、正面に梵字でア(大日如来)と被葬者名として「宗清禅定門」と陰刻され、その上に墨書されている。「宝永五子年」「八月廿六日」と年号と月日が墨書で書かれている。台石は埋まった状態であった。本体には差し込みのための柄はなく、台石に長軸30cm、短軸20cm、深さ3cmの差し込みのための窪みがある。この墓は調査前から立っており、地元の方の話では戦前か戦後すぐにこの場所に移設されたとのことである。土壌などは確認されなかった。

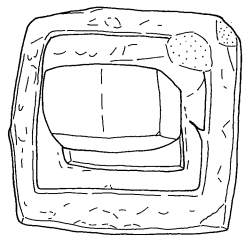
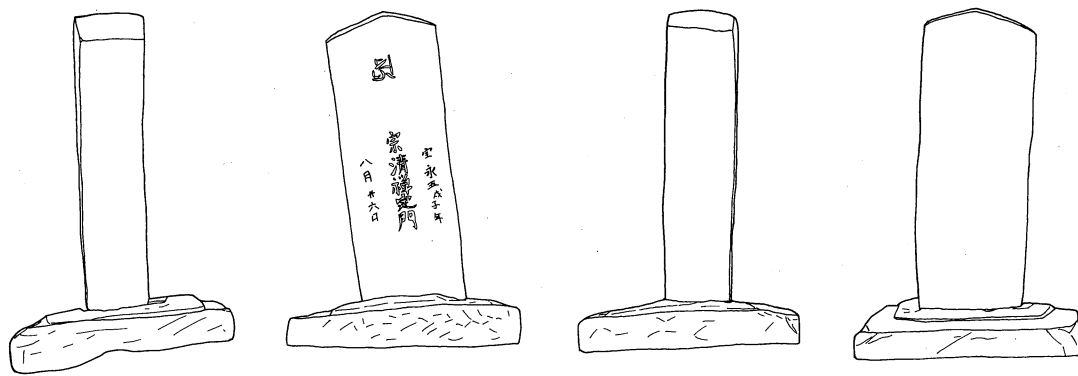
近世墓2は、高さ47.6cm、幅19.4cm、厚さ9.2cmの本体と幅36.5cm、奥行き37cm、高さ9.6cmの台石である。本体は位牌形で、正面にア(大日如来)の梵字と「享保十二年」「須清禅定門位」「九月廿四」と陰刻されている。本体には差し込みのための柄はなく、台石に長軸21cm、短軸9cm、深さ1cmの窪みがある。

近世墓3は、高さ56.8cm、幅23.9cm、厚さ16.6cmの本体である。本体は位牌形で、正面にア(大日如来)の梵字、「正徳二之年」「道善禅定門位」「辰四月十八日」と陰刻されている。差し込みのための柄はない。

近世墓4は、高さ53.5cm、幅22.4cm、厚さ13cmの本体である。本体は位牌形で、正面にア(大日如来)の梵字、「享保十之天」「妙心禅定尼」「巳正月廿日」と陰刻されている。差し込みのための柄はない。

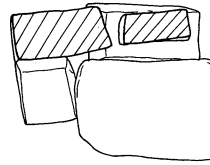
近世墓5は、高さ71.6cm、幅27cm、厚さ15.8cmの本体と幅45.2cm、奥行き38.6cm、高さ17cmの台石である。本体は位牌形で、正面に「丸」に「卍」と、「風化童子」の文字、蓮の花を陰刻している。本体には差し込みのための柄はなく、台石に長軸27cm、短軸14cm、深さ2cmの窪みがある。

近世墓6は、高さ76.8cm、幅31.6cm、厚さ16.7cmの本体である。本体は位牌形で、ア(大日如来)の梵字、「宝永二二年」「通林神社」「十月廿六日」と陰刻されている。差し込みのための柄がある。



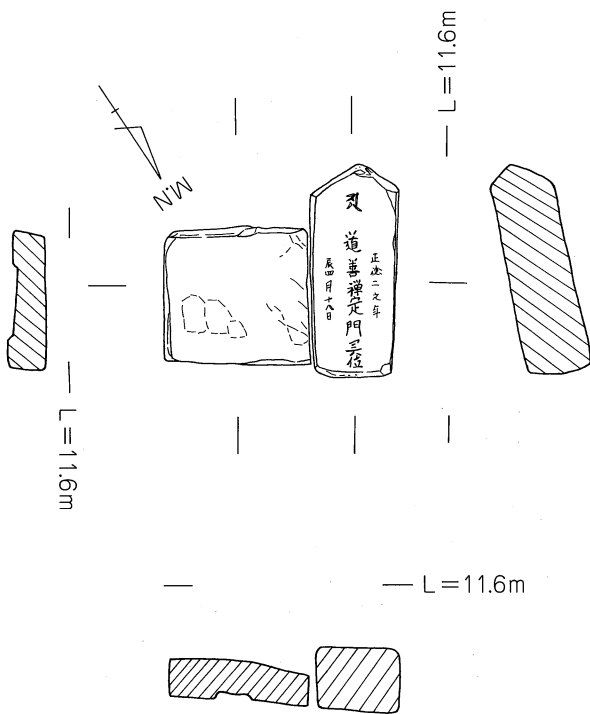
0 50cm

第111図 近世墓1 検出状況実測図



L = 11.65m

L = 11.65m

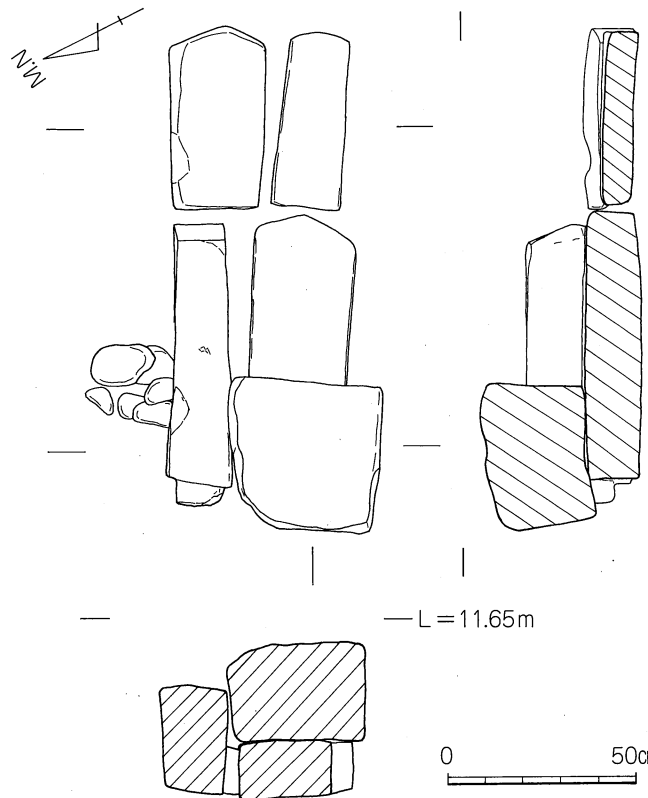


L = 11.6m

L = 11.6m

0 50cm

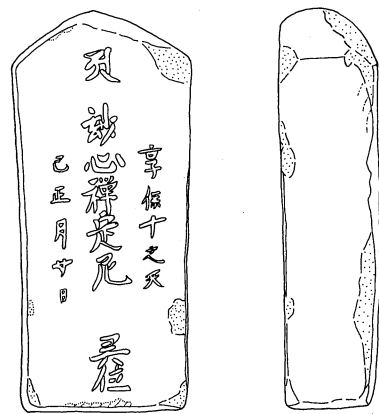
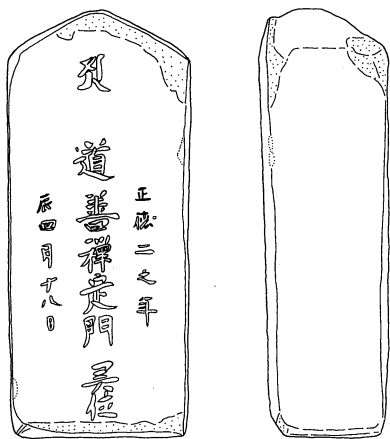
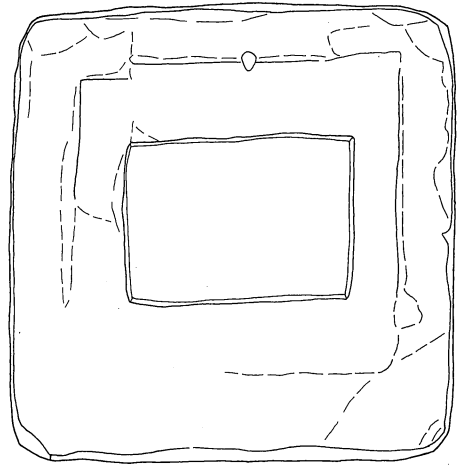
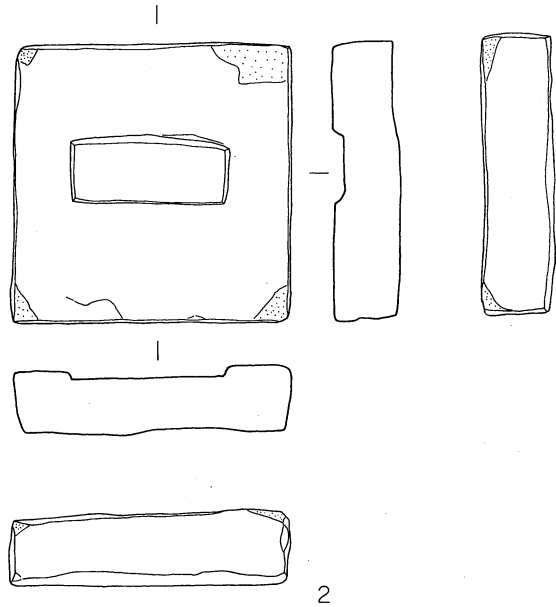
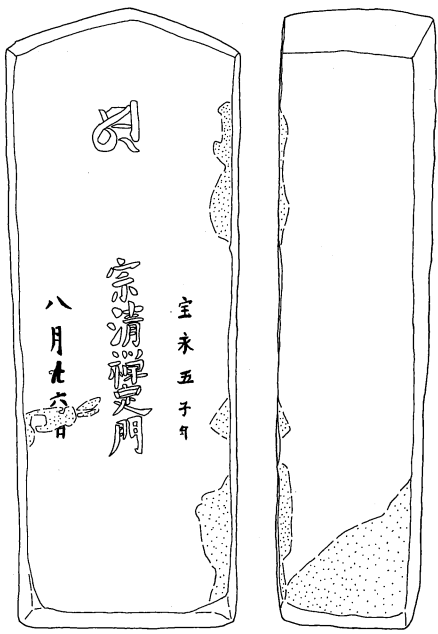
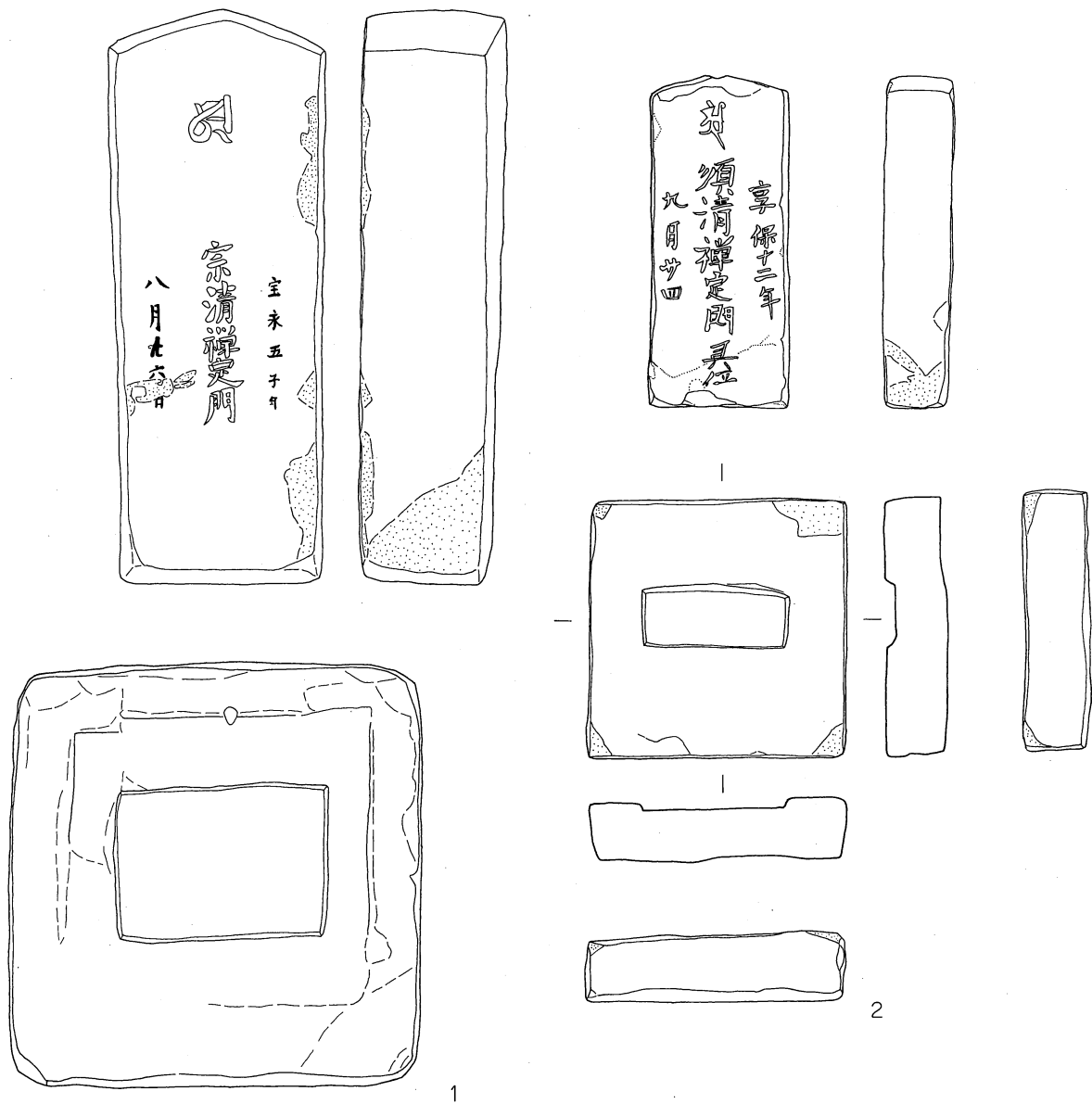
第112図 近世墓2 検出状況実測図



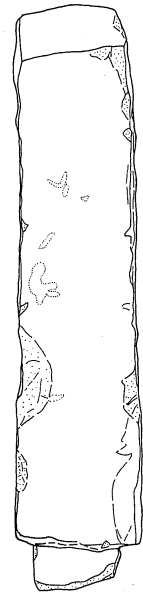
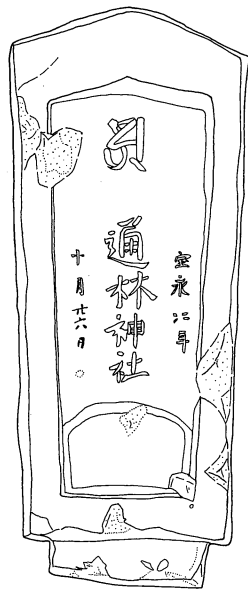
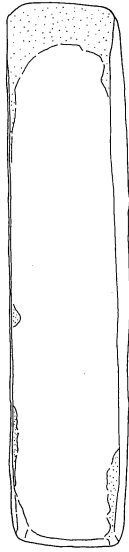
L = 11.65m

0 50cm

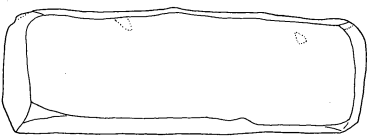
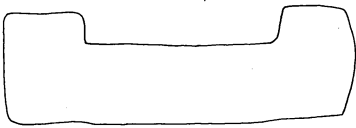
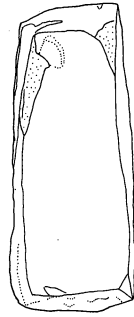
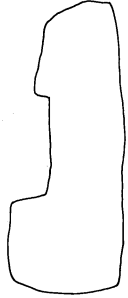
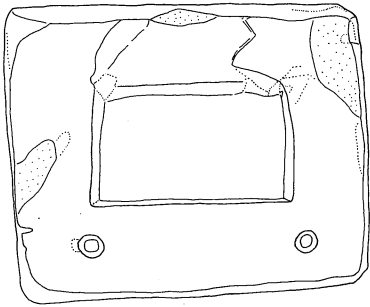
第113図 近世墓3~6 検出状況実測図



第114図 E・F区 近世墓(1)



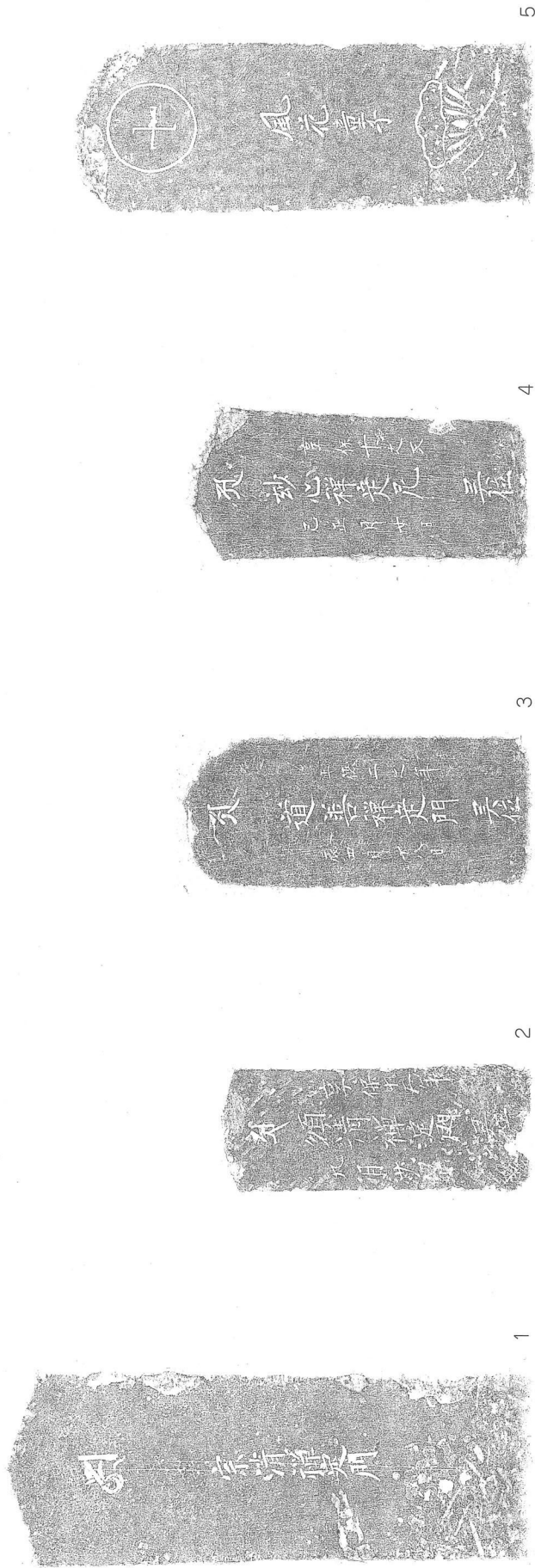
6



5



第115图 E·F区 近世墓(2)



第149図 近世墓 (3)

第37表 近世墓法量表

区・番号	図面番号	図版番号	本体形式	被葬者没年		本体①寸法計測値 (cm)			石台②寸法 (cm)			柄結合	備考	
				年齢	性別	西暦没年	高さ	幅	厚さ	奥行	高さ			
F・1	第114図-1	図版47-1	位牌形	成人	男性	1708	81.4	30.4	20	29.5	30.3	10	-	
E・2	第114図-2	図版47-2	位牌形	成人	男性	1727	47.6	19.4	9.2	36.5	37	9.6	-	
E・3	第114図-3	図版47-3	位牌形	成人	男性	1712	56.8	23.9	16.6	-	-	-	-	
E・4	第114図-4	図版47-4	位牌形	成人	女性	1725	53.5	22.4	13	-	-	-	-	
E・5	第115図-5	図版47-5	位牌形	子ども	-	-	71.6	27	15.8	45.2	38.6	17	-	
E・6	第115図-6	図版47-6	板碑形	-	-	1775	76.8	31.6	16.7	-	-	-	柄有	通林神社と陰刻

(5) 出土遺物 (第117図～129図)

①古墳時代の遺物 (412～419)

412～415は甕である。412は土師器の甕で口縁部が斜め上方に直線的に伸びる。最大径が口縁端部にあり、底部は平底である。風化が著しい。413～415は須恵器の甕の口縁部である。413と415の外表面と内面には自然釉が付着する。416は壺の口縁部であり、417と同一体である。417は壺の頸部から底部である。壺の頸部に絡縄突帯を一条もち、刻み目の奥に布目が残る。最大径が胴部上半にあり丸みをもち、底は丸底である。418は坏蓋の摘みである。419は提瓶の口縁部である。外面と内面に部分的に自然釉が付着する。

②古代の遺物 (420)

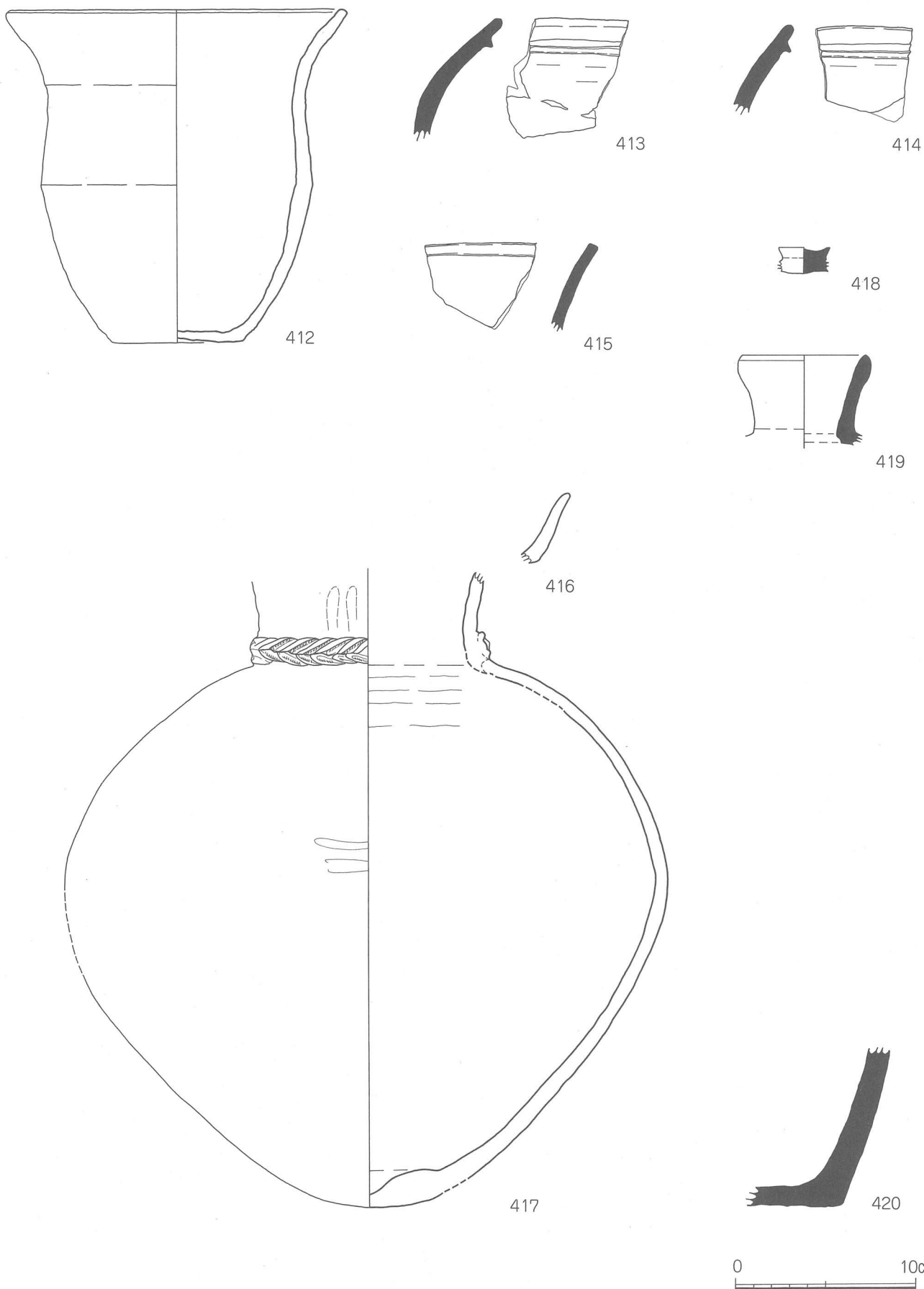
420は古代の須恵器の壺の底部である。胎土に8mm大の黒褐色の粒子と6mm大の石が含まれ、底部には砂が付着している。

③中世の遺物 (421～428)

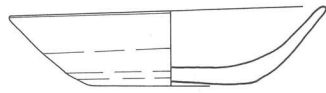
祭祀状の遺構より、土師器の坏5点と小皿3点が出土している。全て完形である。421～425は坏である。口径と底径に比して器高が低く浅いタイプであり、底部切り離し技法は糸切りである。421～422は底部からの立ち上がりは丸みをもち斜め上方に伸びる。口縁部は丸みをもつ。423～425は底部からの立ち上がりは丸みをもち体部は短めで上方に直線的に伸びる。426～428は小皿である。底部切り離し技法は糸切りである。底部からの立ち上がりは丸みをもち、体部は丸みをもち斜めに伸びる。調整は内外面とも回転ナデである。429～432は大きさが6～9cmの河原石である。加工痕や使用痕などはみられない。この河原石の法量については表40を参照してほしい。

④その他の遺物 (433～559)

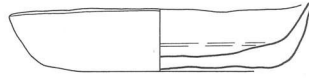
陶磁器類は表採したものがほとんどである。主なものについて、図及び表に示すこととする。また、土錘2点、人形の頭部1点、寛永通宝が6枚出土している。554は江戸初期のもので、555の裏面の「文」は寛文年間(1661～1662)に鑄造されたものである。



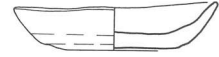
第117图 E·F区 出土土器(1)



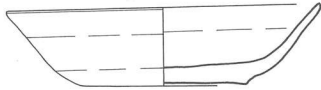
421



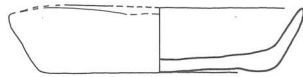
423



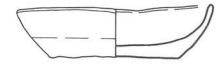
426



422



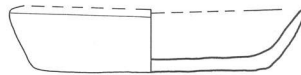
424



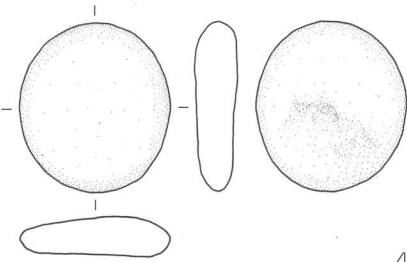
427



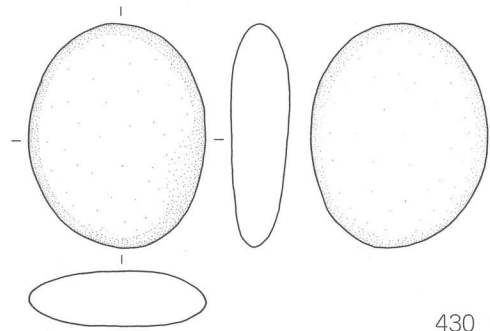
428



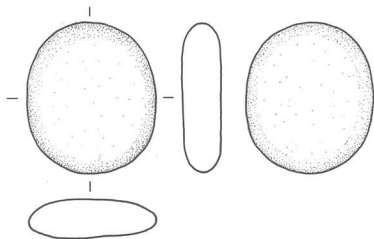
425



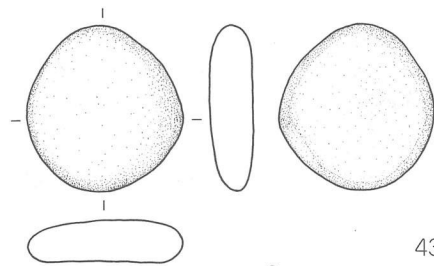
429



430



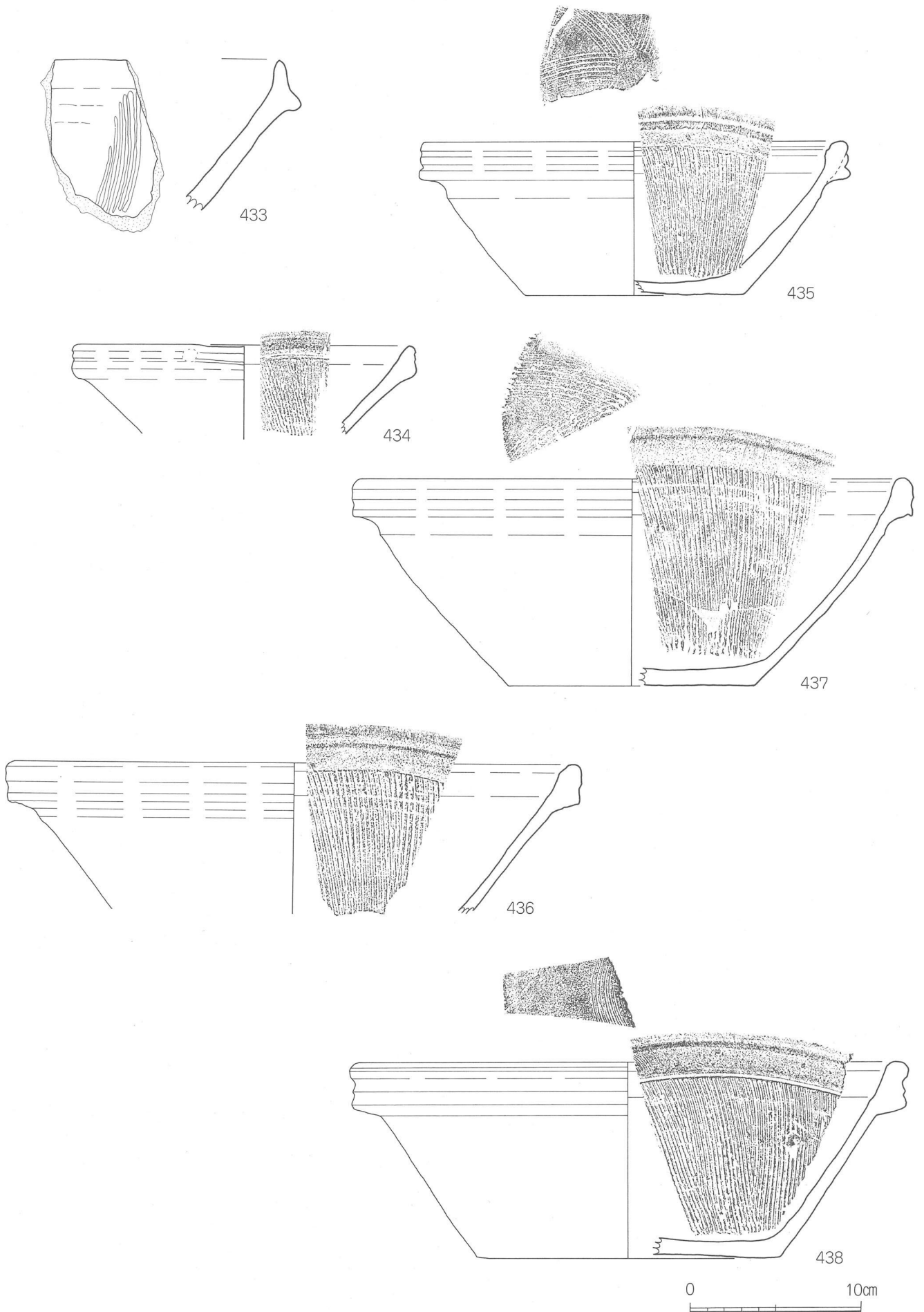
431



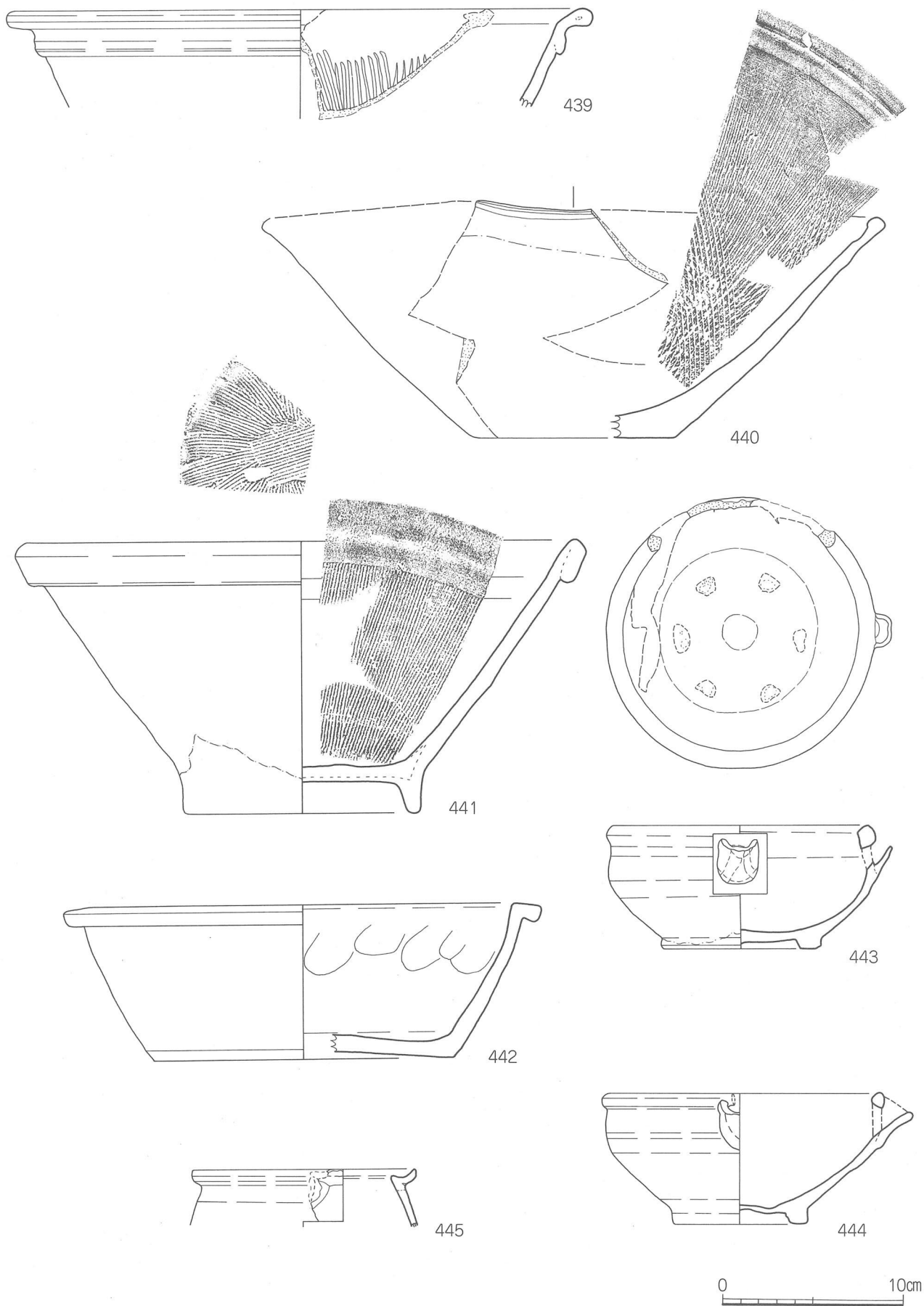
432



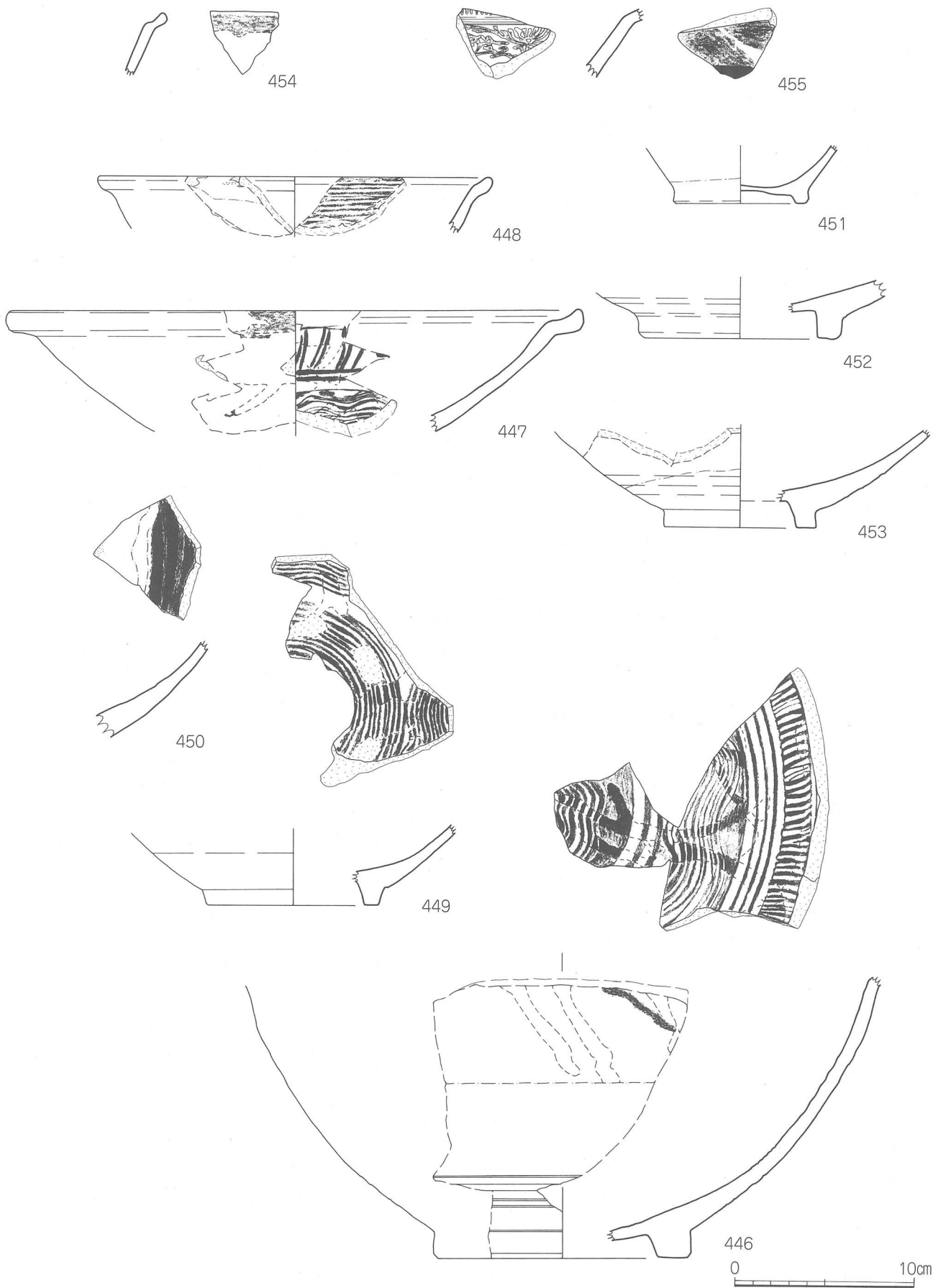
第118図 E・F区 出土土器(2)及び石



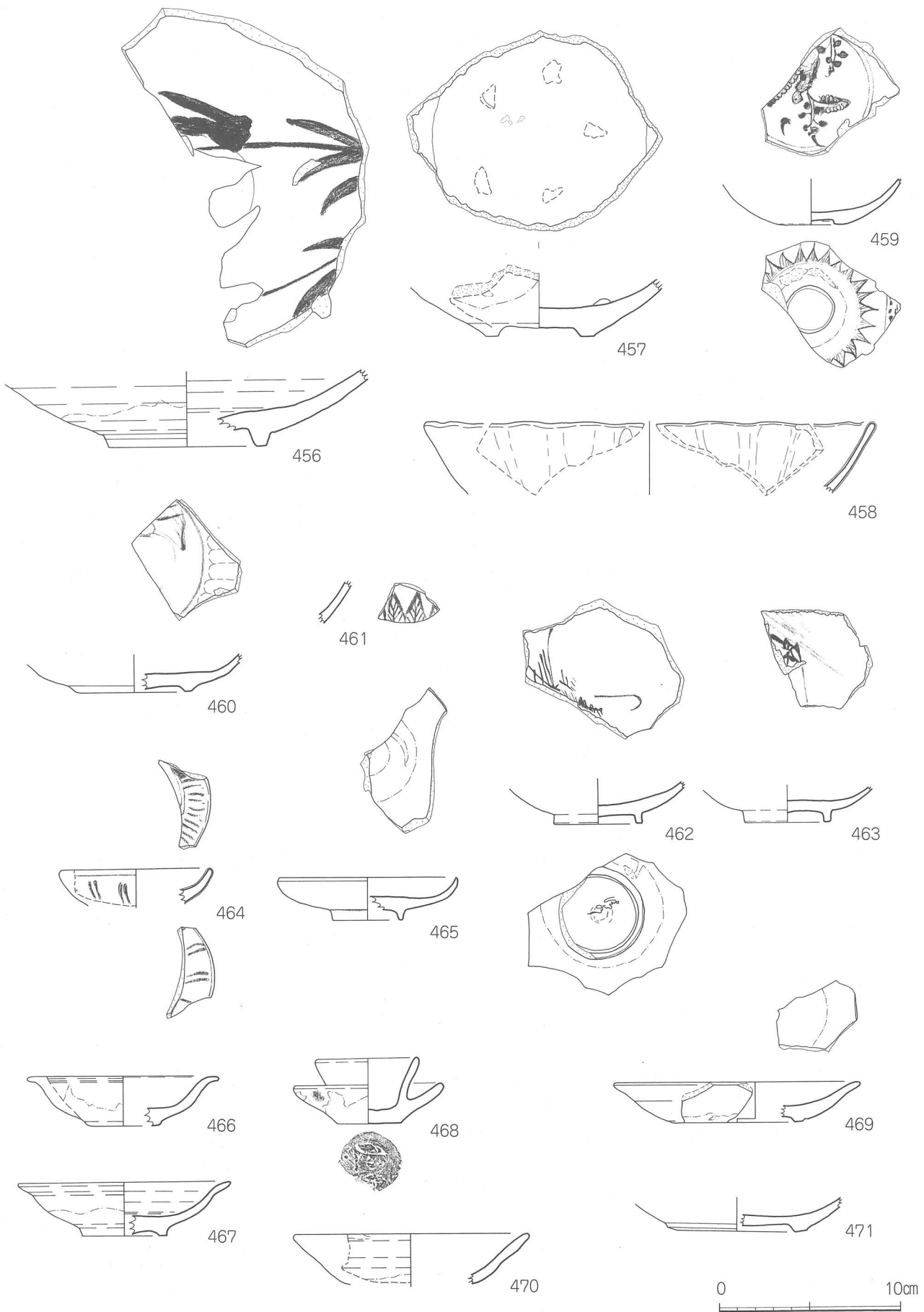
第119图 E·F区 出土陶磁器 (1)



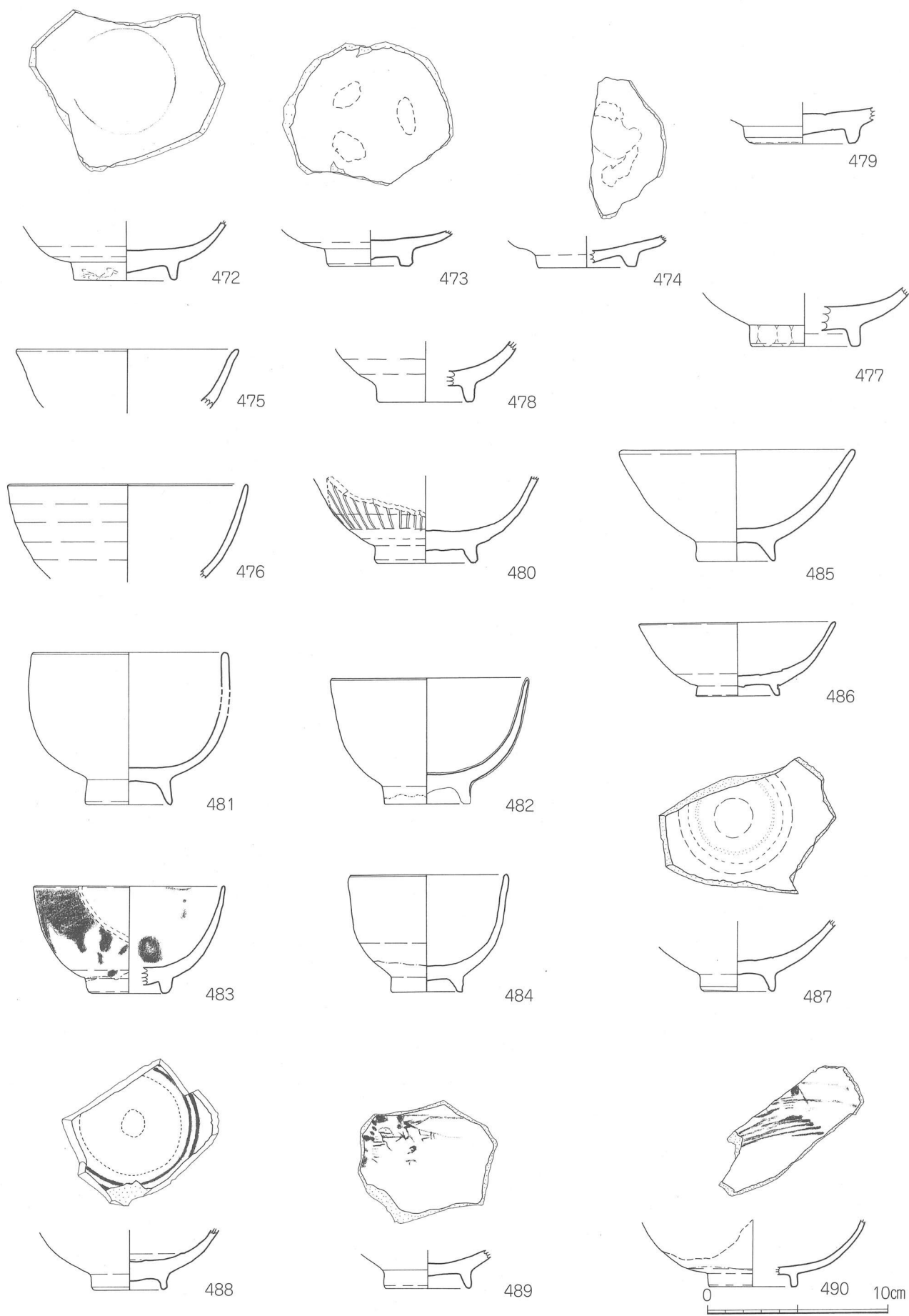
第120图 E·F区 出土陶磁器(2)



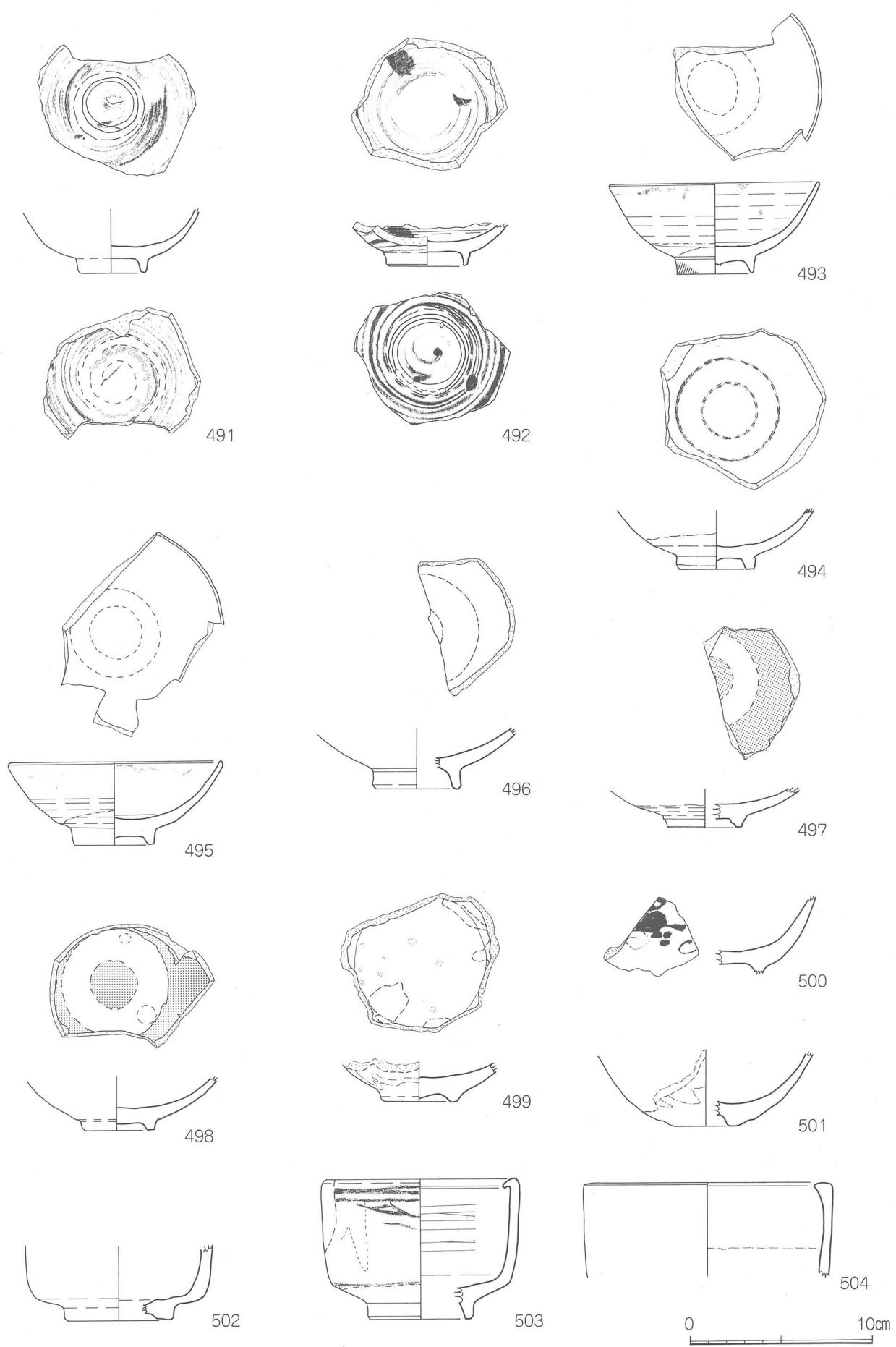
第121图 E·F区 出土陶磁器 (3)



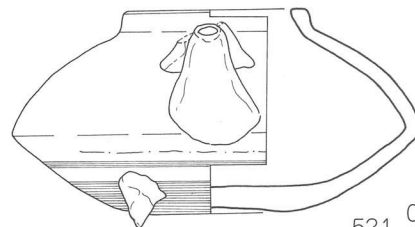
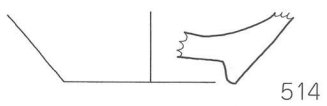
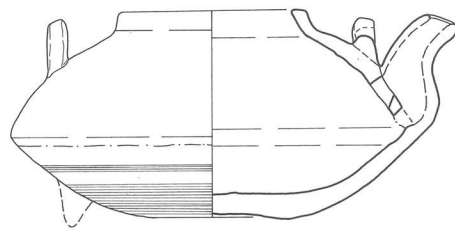
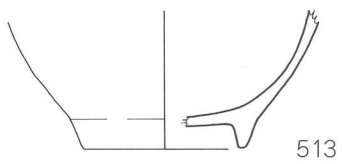
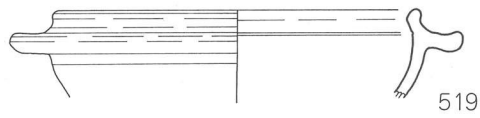
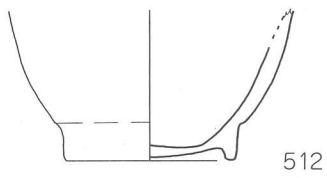
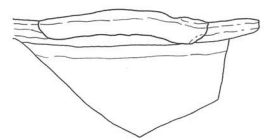
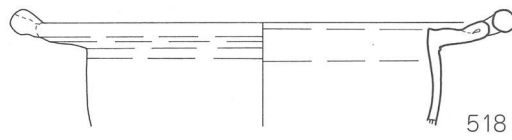
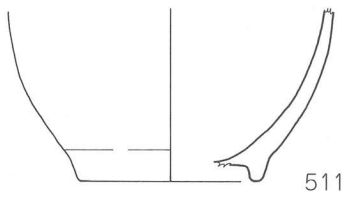
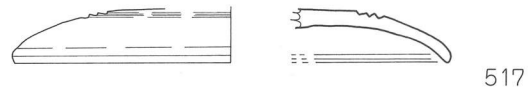
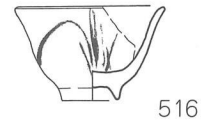
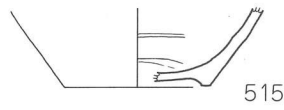
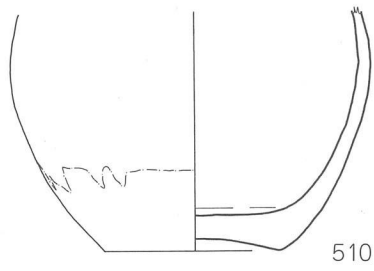
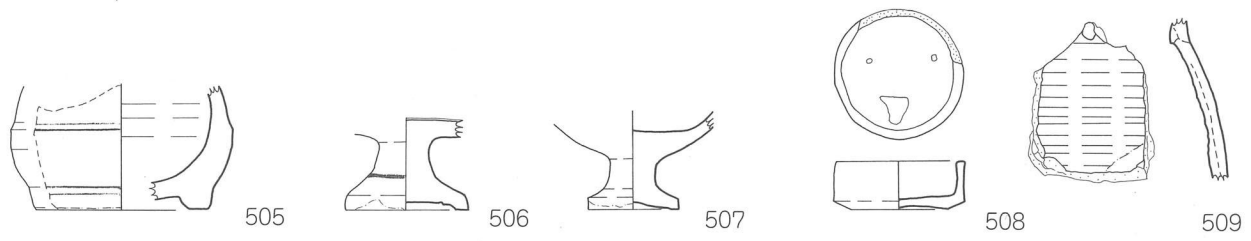
第122图 E·F区 出土陶磁器(4)



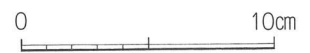
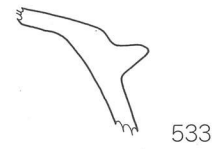
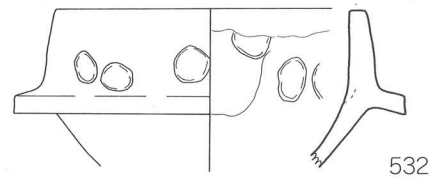
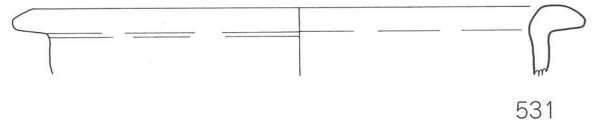
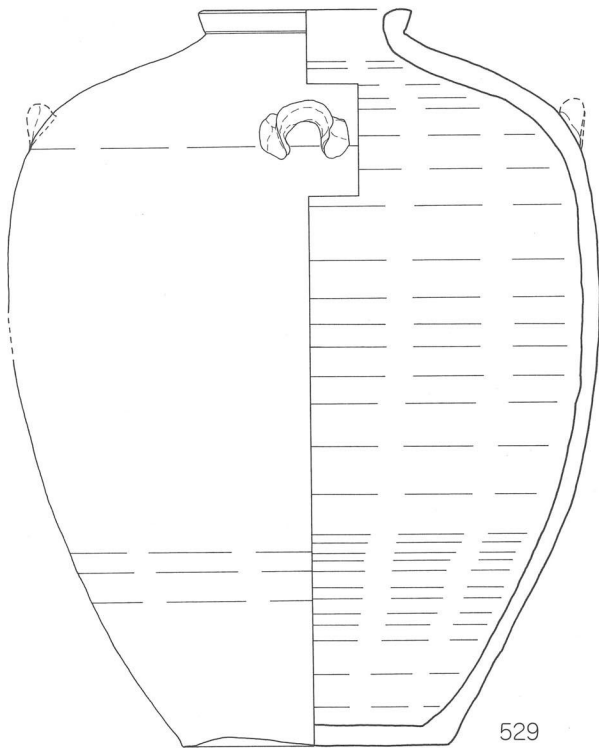
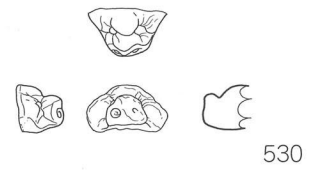
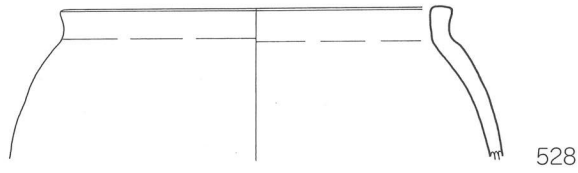
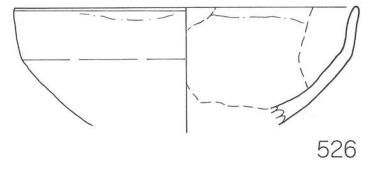
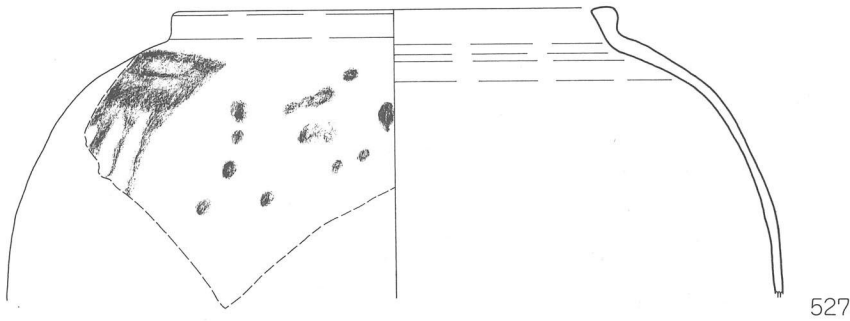
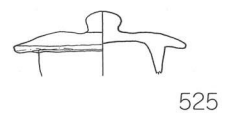
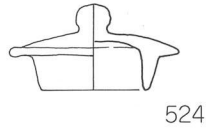
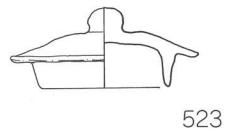
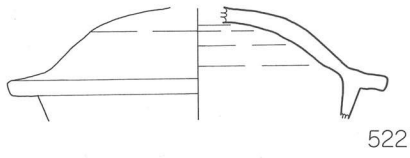
第123图 E·F区 出土陶磁器 (5)



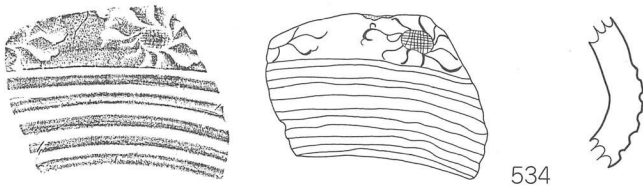
第124图 E·F区 出土陶磁器 (6)



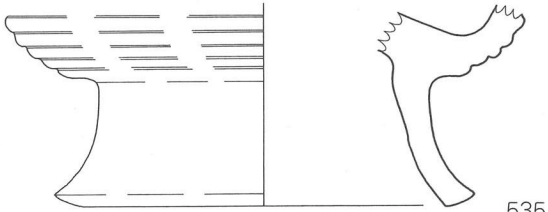
第125图 E·F区 出土陶磁器 (7)



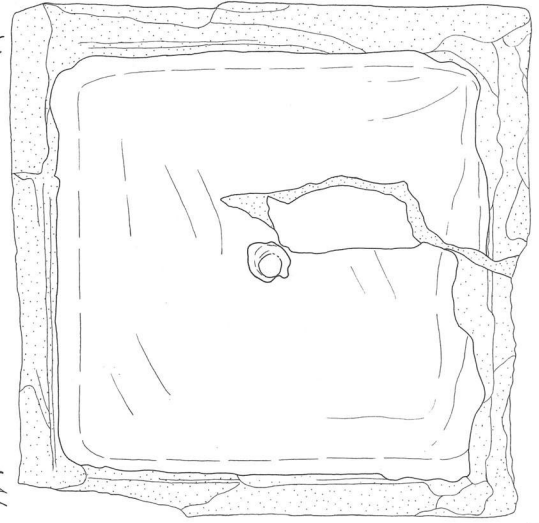
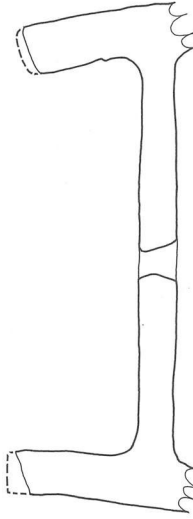
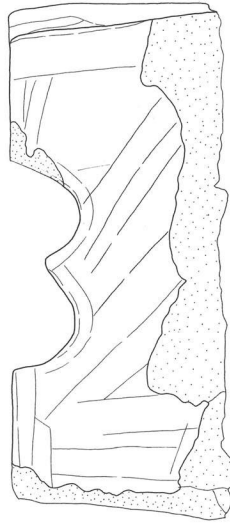
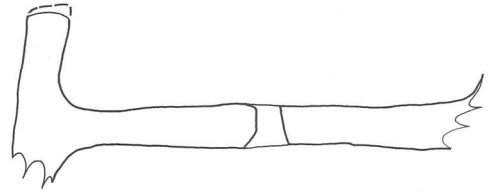
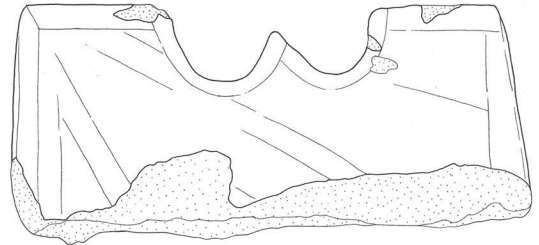
第126図 E・F区 出土陶磁器（8）及び遺物（1）



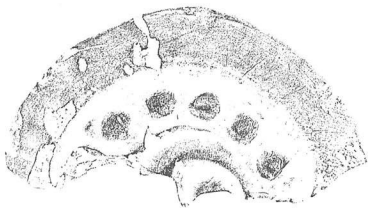
534



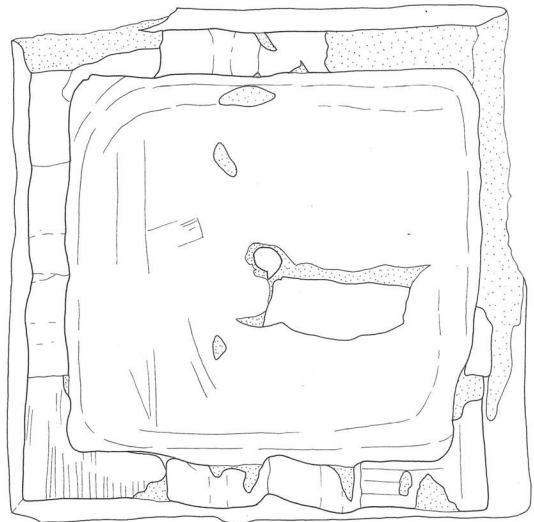
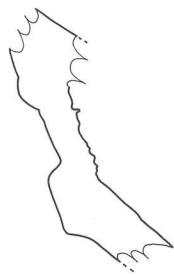
535



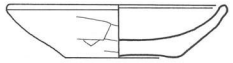
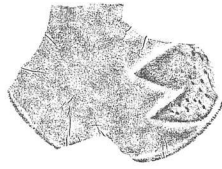
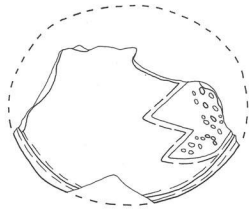
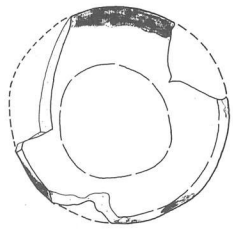
536



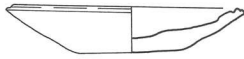
537



第127图 E·F区 出土遺物(2)



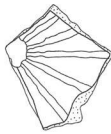
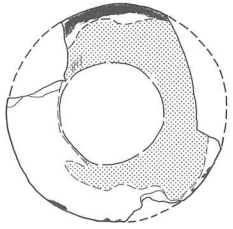
538



539



540



541



548

547



542



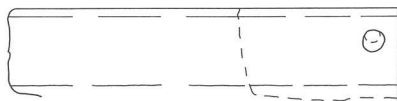
543



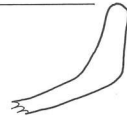
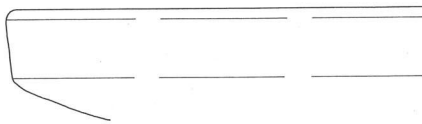
544



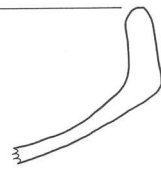
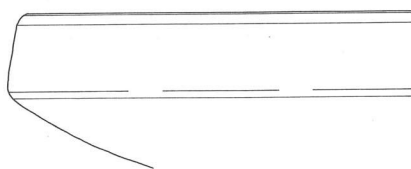
548



545



546

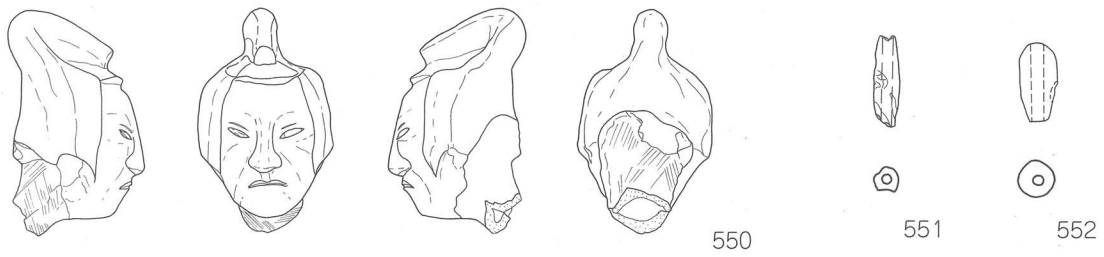
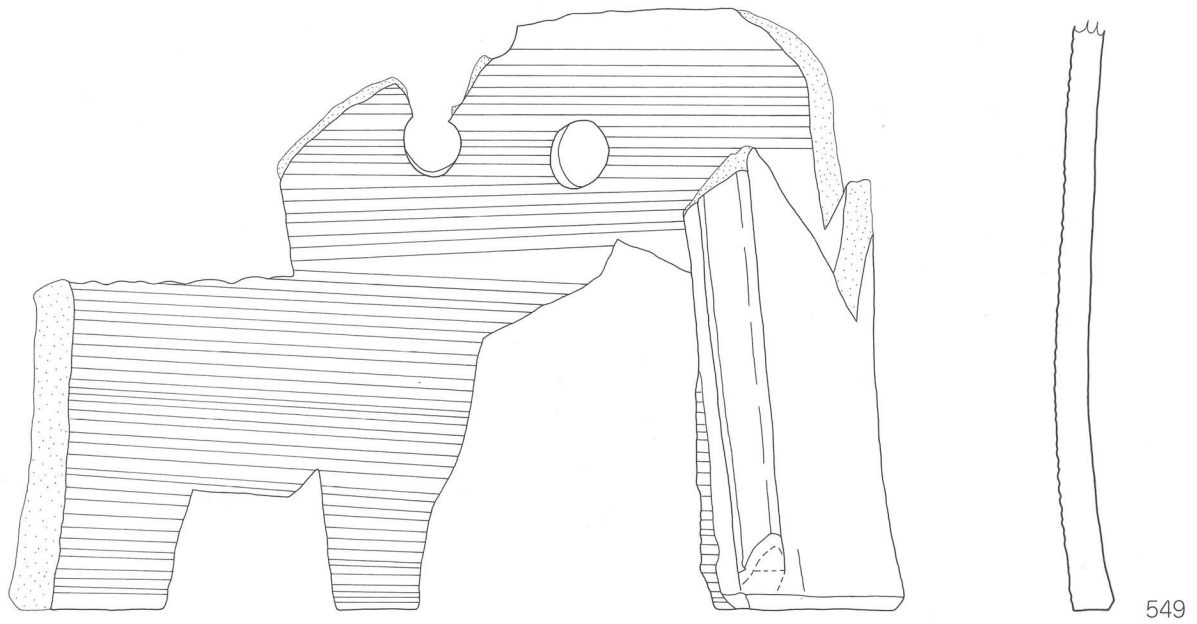


547

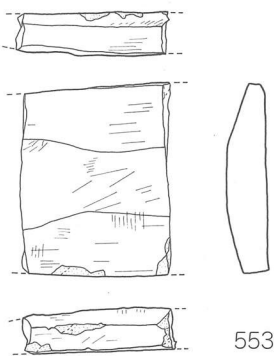
0

10cm

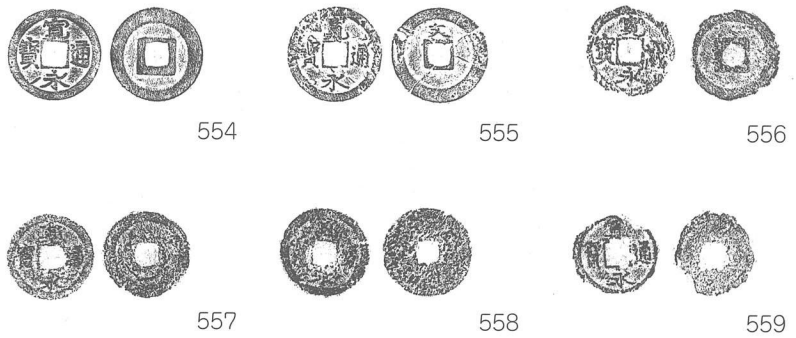
第128图 E·F区 出土遺物(3)



0 10cm



0 10cm



0 5cm

第129图 E·F区 出土遺物(4)

第38表 E・F区出土土器観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
412	土師器	壺口縁部 底部	E区	18.1	7.2	14.5			にぶい赤褐 (5YR 4/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	3mm大の褐色の粒子、微細な赤褐色の粒子を含む。	風化が著しい。
413	須恵器	不明 口縁部	E区				ナデ	ナデ	灰 (N4)	灰 (5Y 6/1)	精良。	
414	須恵器	不明 口縁部	E区				ナデ	ナデ	灰 (N4)	灰 (5Y 6/1)	精良。	
415	須恵器	不明 口縁部	E区				ナデ	ナデ	黄灰 (2.5Y 6/1)	黄灰 (2.5Y 6/1)	精良。	
416	土師器	壺口縁部	F区				横ナデ	ナデ	赤褐 (5YR 4/6)	赤褐 (5YR 4/6)	1mm以下の褐色の粒子を含む。	417と同一個体。
417	土師器	壺頸部 底部	F区				ナデ。ごく一部 ミガキ。頸部に 縁状突起。	ナデ	赤褐 (5YR 4/6)	赤褐 (5YR 4/6)	1mm以下の褐色の粒子を含む。	
418	須恵器	坏蓋 つまみ	F区				ナデ	ナデ	灰黄 (2.5Y 7/2)	灰黄 (2.5Y 7/2)	精良。	
419	須恵器	提瓶口縁部	F区	6.8			ナデ	ナデ	灰 (7.5Y 4/1)	灰 (7.5Y 4/1)	1mm～5mmの乳白色の粒子を含む。	口縁部の外面に自然釉
420	須恵器	壺底部	E区				横ナデ	横ナデ	灰 (N4)	灰 (5Y 6/1)	8mm大の黒褐色の粒子、7mm大のにぶい黄褐色の粒子、1mm大の半透明の粒子を含む。	古代

第39表 F区祭祀状遺構出土土師器観察表

* () は推定値。

遺物番号	種別	器種・部位	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	底部	備考
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
421	土師器	坏口縁部 底部	12.45	6.5	3	回転ナデ	回転ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒色の粒子と透明な輝石を含む。	糸切り	
422	須恵器	坏口縁部 底部	12.35	6.6	3.15	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	8mm大の黄褐色の粒子、1mm大の黒色の粒子を含む。微細な黒色の粒子と透明な輝石を含む。	糸切り	
423	須恵器	坏口縁部 底部	11.9	9.8	2.75	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1mm以下の黒色・灰色の粒子、微細な赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
424	須恵器	坏口縁部 底部	11.55	9.3	2.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1mm程の赤褐色の粒子を含む。	糸切り	
425	土師器	坏口縁部 底部	11.5	8.5	2.5	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1mm程の赤褐色・黒色の粒子を含む。	糸切り	
426	土師器	小皿口縁部 底部	8	5.1	1.95	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	微細な黒色の粒子を含む。	糸切り	
427	土師器	小皿口縁部 底部	7.6	5.1	2	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1mm以下の赤褐色・黒色の粒子を含む。	糸切り	
428	土師器	小皿口縁部 底部	7.5	5	1.8	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1mm以下の黒色の粒子、微細な赤褐色の粒子を含む。	糸切り	

第40表 F区祭祀状遺構出土石計測表

遺物番号	法量 (cm)			重量 (g)	備考
	長さ	幅	厚さ		
429	6.8		5.95	2.2	96.4
430	9		7	2.3	197.2
431	6.05		5.1	1.6	73.7
432	6.7		6.2	1.75	105.2

第41表 E・F区出土陶磁器観察表(1)

遺物番号	器種・部位	区分	出土地点	法量 (cm)				絵付・釉	胎土調	特 徴			産地・製作年代	備考
				口径	器高	高台径	底径			文様・釉調	装飾	成形・焼成技法		
433	摺鉢 口縁部 ~胴部		F区						灰色	梅目は6本1単位。胎土に10mm以下の白色の粒子が含まれる。			備前 (16世紀?)	
434	摺鉢 口縁部 ~胴部		F区	19				鉄釉	赤褐色	片口であるが形骸化。口縁部に施釉。梅目は10本1単位、上からみて左回りに施す。			明石系か?	
435	摺鉢 口縁部 ~底部		E区	24.3	8.8		12.6	透明釉	赤褐色	口縁部に施釉。梅目は8本1単位、上からみて左回りに施す。底部外面に砂付着。			堺・明石系か?	
436	摺鉢 口縁部 ~胴部		E区	32.4					橙色	梅目は13本1単位、上からみて左回りに施す。			堺・明石系か?	
437	摺鉢 口縁部 ~底部		E区	31.4	12		14.2	透明釉	赤褐色	梅目は10本1単位、上からみて左回りに施す。底部外面に砂付着。			堺・明石系か?	
438	摺鉢 口縁部 ~底部		F区	31.25	13.35		17.5		赤褐色	梅目は11本1単位、上からみて左回りに施す。見込み円形の櫛描き。底部外面に砂付着。			堺・明石系か?	
439	摺鉢 口縁部 ~胴部		E区	31.3				透明釉	褐灰色	梅目は8本1単位。内・外面とも薄く施釉。			薩摩 (17世紀後半)	
440	摺鉢 口縁部 ~底部		E区	33.3	12.3		10.35	鉄釉	灰褐色	口縁部に施釉。梅目は14本1単位。片口であるが形骸化。				
441	摺鉢 口縁部 ~底部		F区	30.3	15	12.4		鉄釉	赤褐色	底部付近~高台は露胎。梅目は16本1単位、上からみて右まわりに施す。			兵庫 (近世)	
442	鉢 口縁部 ~底部	陶器	F区	23.3	8.5		16.45	鉄釉	明赤褐色	口縁部釉剥ぎ。底部外面は露胎。内面に指オサエ痕。			薩摩系 (18世紀)	
443	片口鉢 口縁部 ~底部	陶器	F区	14.1	6.7	8.4		透明釉	浅黄色	高台~高台内面は露胎。体部内面に胎土目6。			産地不明 (18世紀)	
444	片口鉢 口縁部 ~底部	陶器	F区	15	7.2	12.4		透明釉	浅黄色	高台~高台内面は露胎。見込みに胎土目3。			産地不明	
445	片口鉢 口縁部	陶器	F区	12.15				緑釉	淡黄色	片口。蓋物。蓋の受部は露胎。			産地不明	
446	大鉢 胴部 底部	陶器	F区			13.9		銅緑釉。鉛釉。 透明釉。三彩。	赤褐色	内面白土刷毛目。外面口縁部周辺透明釉で施釉後緑釉をたらし。外面胴部から底部は露胎。			唐津武雄系 (17世紀)	
447	鉢 口縁部 ~胴部	陶器	E区	31.4				内面銅緑釉。 外面鉄釉。 三彩。	赤褐色	内面白土刷毛目。外面胴部から下は露胎。			唐津武雄系 (17世紀)	
448	鉢 口縁部	陶器	E区	21.8				外面透明釉。 内面透明釉と 銅緑釉。三彩。	赤褐色	白土刷毛目。外面一部露胎。			唐津武雄系 (17世紀)	
449	鉢 底部	陶器	E区			9.7		緑釉。鉛釉。 三彩。	赤褐色	内面白土刷毛目。外面は露胎。見込みに砂目3。			唐津武雄系 (17世紀)	
450	鉢 胴部	陶器	E区					鉛釉	褐色	見込みは露胎。外面は露胎で部分的に釉が付着。			唐津武雄系 (17世紀)	
451	鉢 底部	陶器	E区			7.05		透明釉	灰褐色	高台付近~高台内面露胎。			岩見?	
452	鉢 底部	陶器	E区			10.8		鉄釉	褐色	釉を薄く施す。			唐津武雄系	
453	鉢 底部	陶器	E・F区			8.4		透明釉	赤褐色	外面の高台付近~高台まで露胎。内面と外面の胴部に白土刷毛目。			唐津 (17世紀)	
454	蓋付鉢 口縁部	陶器	E区					透明釉	にぶい橙色	口縁下部と内面に白土刷毛目。			唐津 (17世紀)	
455	鉢 胴部	陶器	F区					透明釉	橙色	内面にスタンプによる花の象徴。			唐津 (17世紀)	
456	大皿 胴部 ~底部	陶器	E区			8.8		透明釉	褐色	見込みに植物の絵柄。内面と外面に白土刷毛目。外面高台付近~高台内面は露胎。			唐津 (16~17世紀)	
457	大皿 底部	陶器	E区			5.9		透明釉	橙色	見込みに白化粧土をした後施釉。見込みに胎土目。外面白土垂らし施釉。			肥前 (16~17世紀)	
458	青磁皿 口縁部	磁器	E区	24.6				青磁釉	灰白色	輪花。			肥前 (17世紀)	
459	染付皿 胴部 ~底部	磁器	E区				3.85	透明釉	灰白色	見込みに鳥花。萼筒底。底部外面は釉剥ぎで胎土目付着。			中国 (16世紀)	
460	染付皿 底部	磁器	E区				6.4	透明釉	灰色	見込みに絵柄。稜花。盃付は露胎。酸化して発色していない。			中国 (16~17世紀)	
461	染付皿 胴部	磁器	F区					透明釉	灰白色	外側面に植物の葉の絵柄。			中国 (16~17世紀)	
462	皿 底部	陶器	E区表採			4.8		透明釉	灰黄色	見込みに錆絵の山水。清水・京焼きのコピー。高台付近~高台内部露胎。			肥前 (17世紀末)	
463	皿 底部	陶器	E区			4.8		透明釉	灰黄色	内面に絵柄。京焼風。外面高台付近~高台内部露胎。			肥前 (17世紀後半)	
464	皿 口縁部 ~胴部	磁器	E区表採	8.25				灰オリーブ色	灰白色	内側面に2本の棒状の櫛描き(連弁文か?)			中国 (時期不明)	
465	白磁皿 口縁部 ~底部	磁器	E区	9.9	2.4	3.8		透明釉	灰白色	底部内面蛇ノ目釉剥ぎ。盃付釉剥ぎ。			中国 (時期不明)	
466	皿 口縁部 ~底部	陶器	E区	10.2	2.8	4		銅緑釉	にぶい黄褐色	内面と外面白土刷毛目。外面の胴部~高台は露胎。			肥前 (16~17世紀)	
467	皿 口縁部 ~底部	陶器	E区	11.65	2.95	5.65		鉛釉	橙色	外面体部~高台露胎。見込みに胎土目、釉が剥けている部分がある。			肥前 (16~17世紀)	
468	灯明皿 口縁部 ~底部	陶器	E区	8.1	3.65		3.5	茶褐色	赤褐色	外面は露胎。内面に白土を垂らす。糸切り底。			唐津 (18世紀)	

第42表 E・F区出土陶磁器観察表(2)

遺物番号	器種・部位	区分	出土地点	法量 (cm)				絵付・釉	胎土調	特 徴			産地・製作年代	備考
				口径	器高	高台径	底径			文様・釉調	装飾	成形・焼成法		
469	皿口縁部～底部	陶器	F区	13.4	2.3	7.35		透明釉	灰色	貫入有。底部内面と外面は露胎。削り底。			産地時代不明。	
470	皿口縁部～底部	陶器	F区	12.9				透明釉	にぶい橙	外面白土刷毛目で一部露胎。			唐津(16~17世紀)	
471	皿胴部～底部	陶器	E区			7.8		透明釉	淡黄色	底部内外面は露胎。削り底。			産地時代不明。	
472	青磁大皿底部	陶器	E区			5.6		青磁釉	灰黄色	貫入有。高台内面は露胎。畳付に砂付着。			肥前(17世紀前半)	
473	皿底部	陶器	E区			4.45		透明釉	灰白色	貫入有。見込みに砂目3。畳付に砂目3。				
474	青磁皿底部	磁器	E区			5.4		銅釉	黒リ-7灰色	見込みに砂目2と露胎部分がある。畳付に砂目1。畳付～高台内面は露胎。			肥前(17世紀前半)	
475	青白磁碗口縁部	磁器	E区	12.25				明リ-7灰色	灰白色				中国(明代)	
476	白磁碗	磁器	E区	13.1				透明釉	灰白色	貫入有。			中国?	
477	青磁碗底部	磁器	E区			5.85		青磁釉	灰色	高台蛇ノ目釉剥ぎ。			中国(明代)	
478	青磁碗底部	磁器	E区			5.1		青磁釉	灰色	外面に貫入有。畳付は露胎。			中国(13~14世紀)	
479	白磁碗底部	磁器	E区			5.7		透明釉	灰白色	内面に釉切れ。畳付～高台内面は露胎。			中国(明末清初)	
480	碗胴部～底部	磁器	E区			5.4		青磁釉	にぶい橙	貫入有。外面に連弁文。			中国の青磁のコピー?	
481	碗口縁部～底部	陶器	E区	10.6	8.5	4.6		透明釉	灰白色	貫入有。畳付は露胎。底部内面に砂目1。			肥前(17世紀後半)	
482	碗口縁部～底部	磁器	F区	10.8	7.05	4.8		透明釉	灰白色	畳付に1mm大の小石付着。畳付～高台内面は露胎。			肥前(17世紀中頃)	
483	碗胴部～底部	陶器	E区	10.5	6.2	3.8		銅緑釉透明釉	黄灰色	外面釉の厚さに斑がある。内面に緑釉を垂らしている。高台～高台内面は露胎。			肥前内野山系(17~18世紀)	
484	碗口縁部～底部	陶器	E区	8.55	6.55	4		鉄釉	赤褐色	白土刷毛目で、口縁部周辺に釉を厚く施す。外面高台付近～高台内面は露胎。			唐津系(16~17世紀)	
485	碗口縁部～底部	陶器	E区	12.75	6.2	4.2		透明釉	灰白色	貫入有。畳付は露胎。			肥前(18世紀)	
486	碗胴部～底部	陶器	E区	10.75	4.1	4.55		透明釉	暗灰色	底部内面は蛇ノ目釉剥ぎ。底部外面は露胎。			肥前(18世紀)	
487	碗底部	陶器	E区			4		透明釉	灰黄色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。畳付露胎で、砂付着。			肥前(17~18世紀)	
488	青磁碗底部	磁器	E区表採			4.4		青磁釉	灰色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。畳付釉剥ぎで砂付着。			肥前有田周辺(18~19世紀)	
489	碗底部	陶器	E区			4.7		透明釉	淡黄色	内面に絵柄。貫入有。畳付露胎。				
490	碗胴部～底部	陶器	E区			4.8		透明釉	淡黄色	見込みに絵柄。貫入有。高台付近～高台内面は露胎。京焼風。			肥前(17世紀)	
491	碗胴部～底部	陶器	E区			3.6		透明釉	暗灰黄色	見込みに右回りの釉剥ぎ、砂付着。白土刷毛目。畳付露胎、砂付着。			唐津(17~18世紀)	
492	碗底部	陶器	E区			4.5		透明釉	にぶい黄橙	外面に白土刷毛目。内面に白土を垂らして施釉。畳付露胎。			肥前(17~18世紀)	
493	碗口縁部～底部	陶器	E区	11.4	5	4.2		透明釉	にぶい黄橙	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。口縁部周辺に白化粧土。削り出し高台。高台付近～高台内面露胎。			肥前(18世紀前半)	
494	碗胴部～底部	陶器	E区			4.2		透明釉	灰黄褐色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。口縁部周辺に白化粧土。削り出し高台。高台付近～高台内面露胎。			肥前(18世紀前半)	
495	碗口縁部～底部	陶器	E区	11.6	4.6	4.35		透明釉	灰黄褐色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。口縁部周辺に白化粧土。削り出し高台。高台付近～高台内面露胎。			肥前(18世紀前半)	
496	碗胴部～底部	陶器	E区			4.5		透明釉	灰白色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。			肥前(17~18世紀)	
497	碗胴部～底部	陶器	E区			3.85		銅緑釉	灰褐色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。外面露胎。			肥前内野山(17~18世紀)	
498	碗胴部～底部	陶器	E区			4		銅緑釉	灰褐色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ。			肥前内野山(17~18世紀)	
499	碗底部	陶器	E区			4.1		鉛釉	にぶい赤褐色	見込みに胎土目1。外面釉を垂らす。底部外面は露胎。焼成不良。			肥前か熊本(17世紀)	
500	碗胴部～底部	磁器	E区					透明釉	灰白色	外面面に青色で文様。			肥前系(18世紀)	
501	碗胴部～底部	陶器	E区			3.6		銅鉛釉	にぶい赤褐色	外面腰部～底部は露胎。削り底。			肥前系(16~17世紀)	
502	碗胴部～底部	陶器	E区			5.4		白泥釉	褐色	高台付近～高台内面露胎。			肥前系(16~17世紀)	
503	香炉・火入口縁部～底部	陶器	E区	10.4	7.7	5.5		透明釉	灰リ-7色	口縁部外面に3条の線。鳥文。内面、腰部～底部は露胎。			肥前系(18世紀前半)	
504	火入口縁部～胴部	磁器	E区	13				青磁釉	灰色	内面体部から下露胎。			肥前系(17~18世紀)	

第43表 E・F区出土陶磁器観察表(3)

遺物番号	器種・部位	区分	出土地点	法量 (cm)				絵付・釉	胎土調	特 徴			産地・製作年代	備考
				口径	器高	高台径	底径			文様・釉調	装飾	成形・焼成技法		
505	火入底部	磁器	E区			6.8		染付釉	灰白色	外面体部に2条の線と高台外面に2条の線。内面見込み露胎で釉が垂れている。			中国 (16~17世紀)	
506	仏飯器 坏部~脚部	磁器	E区				4.35	青磁釉	灰白色	底部露胎。			肥前系 (17~18世紀)	
507	仏飯器 坏部~脚部	磁器	E区				3.6	染付釉	灰色	底部露胎。			肥前系 (17~18世紀)	
508	合子 口縁部~底部	陶器	E区	5	1.95			灰釉	にぶい橙色	内面に針支えの痕3。口縁部釉剥ぎ。底部外面露胎。			産地不明	
509	瓶? 頸部~胴部	陶器	E区					灰釉	灰オリーブ色	貫入有。			古瀬戸	
510	瓶 胴部~底部	陶器	E区				6.95	鉄釉	赤褐色	外面腰部~底部は露胎。底部系切り痕。			肥前唐津 (17世紀)	
511	瓶 胴部~底部	磁器	E区				7.2	青磁釉	灰色	内面露胎。疊付釉剥ぎ。			肥前系 (18世紀後半)	
512	瓶 胴部~底部	磁器	E区				6.4	青磁釉	灰色	内面露胎。疊付釉剥ぎで、砂付着。底部内面に鉄分付着。底部外面に砂付着。			九州	
513	瓶 胴部~底部	磁器	E区				6.35	青磁釉	暗灰色	内面露胎。疊付胎土目1。			肥前系 (18~19世紀)	
514	瓶 底部	磁器	E区				6.9	透明釉	灰白色	内面露胎。削り底。疊付釉剥ぎ。				
515	瓶 胴部~底部	磁器	E区				5.7	透明釉	灰色	内面露胎。疊付露胎。削り底。			九州 (18~19世紀)	
516	猪口 口縁部~底部	磁器	E区	5.7	3.8	2.2		染付釉	灰白色	高台~高台内面露胎。外面面に華文。			肥前系 (17世紀前半)	
517	鍋蓋 天井部~口縁部	陶器	E区	17.1				透明釉	灰白色	天井部付近に3条の沈線。口縁部は露胎。			産地不明	
518	鍋 口縁部~鈚部	陶器	E区	14				灰釉	淡黄色	内面露胎。蓋の受部露胎。			産地不明	
519	鍋 口縁部~胴部	陶器	E区	17.3				緑釉	淡黄色	頸部内面露胎。取っ手付。			産地不明 (17~18世紀)	
520	不明 口縁部	陶器	F区					透明釉	赤褐色	内側面にスタンプで花文。白土刷毛目。			熊本? (17世紀)	
521	土瓶 口縁部~底部	陶器	F区	7.2	8.7	4.9		鉄釉	にぶい黄褐色	3足。口縁部露胎。底部は露胎。			肥前系又は薩摩 (18世紀末)	
522	土瓶蓋 天井部~口縁部	陶器	表採	14.9				鉄釉	赤褐色	内面露胎。			薩摩?	
523	土瓶蓋 摘み口縁部	陶器	E区	7.5				鉄釉	暗赤褐色	内面露胎。			薩摩?	
524	土瓶蓋 摘み口縁部	陶器	表採	6.7				緑釉	暗赤褐色	内面露胎。			薩摩?	
525	土瓶蓋 摘み口縁部	陶器	E区	6.9				緑釉	暗赤褐色	内面露胎。			薩摩?	
526	天目腕? 口縁部~胴部	陶器	E区	13.6				透明釉。 口縁部付近:鉄釉?	灰色	外面:口縁部付近より下は無釉。		内面焼成不良	産地不明	
527	甕 口縁部~胴部	陶器	E区	17.1				透明釉	黄灰色	外:白土流し掛け。口縁部無釉。			産地不明	
528	甕 口縁部~胴部	陶器	E区	14				透明釉	暗灰色	口縁部釉剥ぎ。貫入有。			産地不明	
529	大甕 口縁部~底部	陶器	表採	16.4	59	21		鉄釉	暗褐色	四耳。			薩摩系 (18世紀)	
530	香炉 脚?	磁器	E区					青磁釉	灰白色	陰刻文を施す。			瀬戸?	

第44表 E・F区出土瓦質土器観察表

遺物番号	器種	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			胎 土	備 考
				口径	底径	器高		
531	瓦器	鍋 口縁部	F区	21			1mm以下の赤褐色の粒子を含む	口縁部に煤付着。
532	瓦器	鍋 口縁部~胴部	E区	8.25			1mm大の黒褐色の粒子を含む。	胴部外面に煤付着。
533	瓦器	鍋蓋 天井部~口縁部	E区				微細な黒色の粒子と輝石を含む。	
534	瓦質	火入れ 胴部	E区				微細な黒色の粒子を多く含む。	535と同一固体
535	瓦質	火入れ 腰部~底部	E区		16.5		1mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒色・灰色の粒子を含む。	花文の陰刻。産地不明 (18~19世紀)
536	瓦質	不明	E区				精良。	
537	瓦	軒丸瓦	E区				4mm以下の灰色の粒子を含む。	

第45表 E・F区出土土器観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
538	土器	灯明皿 口縁部～底部	E区	8.6	4.45	2.1	縦方向と横方向のハケ目。	ナデの後に指押さえ	にぶい黄橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR 7/4)	1mm以下の黒褐色の粒子と、微細な輝石を含む。	口縁部に煤付着。
539	土器	皿 口縁部～底部	E区	9.5	4.25	1.85	縦方向と横方向のハケ目。	丁寧なナデ。赤色の顔料付着。	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1mm以下の黒褐色・赤褐色の粒子と、微細な輝石を含む。	楕円形。
540	土器	皿 底部	E区			5	斜め方向のハケ目。	丁寧なナデ。スタンプによる花文が陽刻。	にぶい黄橙 (7.5YR 7/3)	にぶい黄橙 (7.5YR 7/3)	2mm以下の赤褐色の粒子と、微細な黒色の粒子、微細な輝石を含む。	内面に煤が付着。
541	土器	皿 底部	F区			5.4	ナデ。	スタンプによる文様を陽刻。	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1mm以下の褐色の粒子と、微細な輝石を含む。	
542	土器	皿 底部	E区			5.3	斜め方向のハケ目。	スタンプによる文様を陽刻。	にぶい黄橙 (7.5YR 7/3)	にぶい黄橙 (7.5YR 7/3)	1mm以下の赤褐色の粒子と、微細な輝石・黒色の粒子を含む。	
543	土器	皿 口縁部～底部	E区				斜め方向のナデ。	スタンプによる文様を陽刻。赤色の顔料付着。	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1mm以下の赤褐色及び黒褐色の粒子、微細な輝石を含む。	
544	土器	皿 口縁部～胴部	F区				斜め方向のナデ。	スタンプによる文様を陽刻。赤色の顔料付着。	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1mm以下の黒褐色の粒子と、1mm以下の赤褐色の粒子を含む。	

第46表 E・F区出土焙烙観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			胎 土	備 考
				口径	底径	器高		
345	土器	焙烙	F区	30.45			2mm以下の赤褐色の粒子を含む。	穿孔有。
546	土器	焙烙	E区	32.75			1.5mm以下の白色と赤褐色の粒子を含む。	
547	土器	焙烙	E区	30.9			4mm大の黒色の粒子と、1mm以下の赤褐色の粒子、微細な黒色の粒子を含む。	
548	土器	焙烙	E区				2mm以下の白色透明の粒子と、微細な褐色の粒子を含む。	

第47表 E・F区出土遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種・部位	法量 (cm)					胎 土	備考
				口径	底径	器高	孔径	重量		
549	E区		七輪? 胴部～底部		22.0			1.2(厚さ)	1mm以下の黒色の粒子と赤褐色の粒子を含む。	
550	E区		人形頭部						精良。	
551	E区		土錘	3.65(全長)	1.0(幅)	1.0(厚さ)	0.4	2.9g		
552	E区		土錘	3.1(全長)	1.45(幅)	1.4(厚さ)	0.5	5.0g		
553	E区		砥石	6.1(長さ)	7.7(幅)	1.7(厚さ)		129.2g		

第48表 E・F区出土古銭計測表

番号	銭 名	出土地点	直径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備 考
554	寛 永 通 宝	表 採	2.50	1.12	0.65	3.40	
555	寛 永 通 宝	E 区	2.55	1.48	0.60	2.10	
556	寛 永 通 宝	E 区	2.30	1.56	0.60	2.40	
557	寛 永 通 宝	E 区	2.35	1.31	0.60	2.40	
558	寛 永 通 宝	F 区	2.40	1.26	0.60	3.00	
559	寛 永 通 宝	F 区	2.30	1.22	0.60	1.20	破損が著しい。

第Ⅳ章 石塔群の復元と移転作業について

はじめに

迫内遺跡では、五輪塔の空風輪61基、火輪21基、水輪33基、地輪57基と板碑15基（完形2基、基部のみ12基、頭部のみ1基）、近世墓6基が出土し、当初地元での移転保存をお願いしたが、移設場所の確保などの問題で、蓮ヶ池史跡公園内（宮崎市大字芳士岩永迫）の「石塔のはらっぱ」に移転することになった。

移転に際しては、風化の著しい石塔を除き、ほとんどの五輪塔と板碑を「石塔のはらっぱ」に移した。板碑のなかには完形のもが2基折れた状態のもがあり、センター（国富分室）に持ち帰り科学的な風化防止・強化と接合復元を行った。その後復元した板碑を宮崎歴史文化館に移し、五輪塔と板碑を検出状況に近い状態になるように配列した。

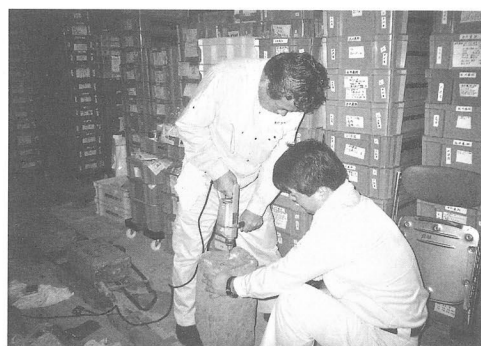
第1節 板碑の復元作業

板碑の復元にあたっては、石材が凝灰岩で風化しやすいものであること、墨書の残りも明瞭であること、移転後は露天での保存になることの3点から、板碑の化学的な補修・強化を行い接合することにした⁽¹⁾。

まず板碑の強化のためOH-100液を含浸させる作業を行った。まず噴霧器を使用して全面に吹き付け、防水シートを用いてプール状の囲みを作り全体を含浸させた。含浸後、2週間ほど自然乾燥させた。

次に接合では、補強用のステンレス棒を埋め込み、接着剤を用いた。作業手順は、①接合する板碑の接着面をきれいな状態の面にする。②板碑の接着両面に柄用の穿孔を行うための箇所を決める。③最初に径6mmの電動ドリルで孔をあけ、次に径13mmの電動ドリルで孔を大きくし、ステンレス棒よりも多少大きめで長めの柄孔をあける。④ステンレス棒を柄孔に入れ、接着面をあわせて接合具合をみる。⑤一方の接合面に接着剤「アラルダイト2012」を塗り、柄内にも十分流し込む。ステンレス棒にも塗り、柄内にステンレス棒をさし込む。⑥もう一方の接合面にも同様に接着剤を塗り接着させる。⑦接着後は接着剤が十分に硬化するまで荷締め器で板碑を固定し、乾燥させる。⑧接着面からはみ出した接着剤はアセトンでふきとっておく。⑨接着剤に石塔などの粉を混ぜ、接合面または破損部に塗り込む。

また、墨書が明瞭に残っていたので、その面の風化を防ぐためにOH-100液を塗り強化する作業を行った。



補強柄穴の穿孔作業



風化防止

第2節 石塔群の移転作業

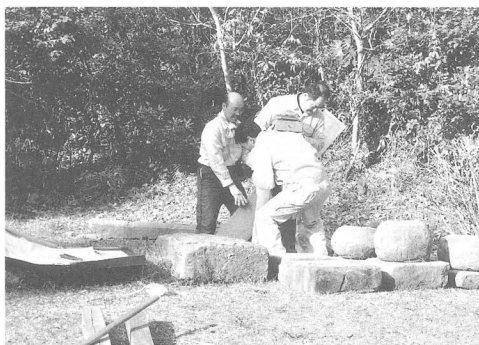
石塔群は蓮ヶ池史跡公園内の「石塔のはらっぱ」の一角約20m²に移転した。この場所には、宮崎学園都市遺跡発掘調査で検出した石塔群や施設周辺の民家にあった石塔群が移転されていた。遊歩道沿いに一段高くなった場所があり、そこに大型地輪を中心として石塔群を配置した。

移転では、現地で出土した状態で石塔群を配置することが現地保存に最も近いが、場所が狭いため、石塔群の中心的な人物のものと考えられる大型地輪とセットになる板碑を2カ所に配置した。その他の石塔群は、1カ所にまとめて配置し、近世墓も配置した。なお、現地には芝生が養生されているために、石塔群の周囲には河原石を配置しなかった。石塔群は、大型の地輪が2組または3組でまとめて2つのグループをつくっており、それぞれのグループの背後に6～7本の板碑が配置されていた。1グループは中心となる大型地輪3基を中心に小型地輪を2～3基の組み合わせで計8基を配し、その背後に板碑を7本、その横に3基の小型地輪を配置した。2グループは大型地輪3基とその前に小型地輪を2基、背後に板碑を5基配置した。スペースの関係で石塔の配置がややこぢんまりとしたが、石塔群の中心的な大型地輪の配置の様子が十分わかるように移設できた。

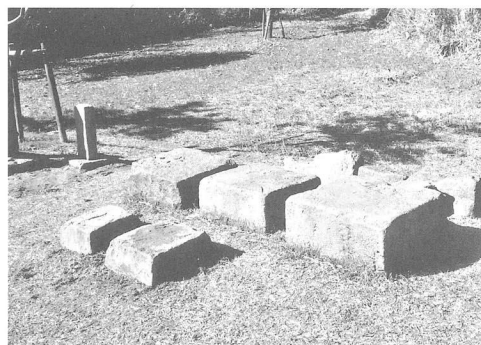
大型の地輪のなかには、風化のために脆くなっているものもあったが、今回は化学的な強化の処理をすることができなかった。覆い屋などの施設もなく雨ざらしの状態であるので、石材がますます風化して摩耗することが考えられ、何らかの化学的な処置をとらなければならないと考える。

(注)

(1) 株式会社アクトの池之上晃敏氏の指導のもとに復元作業を行った。



石塔群の復元作業



復元した五輪塔と板碑 (1)



復元した五輪塔と板碑 (2)



移転地遠来

第V章 まとめ

第1節 古墳時代の遺構と遺物

(1) 低丘陵部の古墳

迫内遺跡では、西側と北側の低丘陵部で調査を行い、北側の丘陵部で2基の墳丘墓を検出した。西側の丘陵部の頂上は削平されており遺構の確認はできなかったが、墓前祭祀に使用したとみられる須恵器が出土した。出土した坏蓋はTK43時期とみられる。また性格不明の土器埋設土抗を検出した。東側斜面より6世紀後半代とみられる横穴墓が検出されており、横穴墓の墳丘である可能性もあるが、墳丘部が削平されていることから詳細は不明である。

北側の丘陵部で検出した2号古墳、3号古墳は、ともに地山整形の古墳であり木棺直葬とみられる。墳丘部はすでに崩落しており、墳丘測量により楕円形の円墳と方墳であることが確認された。2号古墳の周溝から出土した土師器の甕は5世紀前半代とみられる。3号古墳の周溝内から古墳時代前期の4世紀後半頃のものともみられる二重口縁の壺が出土している。また、3号古墳の主体部の直上や周溝内から出土した土師器の高坏の脚はエンタシス状であり、こうした特徴は古墳時代前期から中期にかけてみられる。これらのことから2号古墳、3号古墳は古墳時代前期から中期の4世紀後半代～5世紀前半代とみられる。弥生時代後期には壺形土器あるいは器台形土器を墳丘にめぐらせることがはじまるといわれており⁽¹⁾、周溝内から出土した土師器類も墳丘の周囲に巡らされていたものとみられる。また出土した甕や二重口縁の壺の底部は、焼成後穿孔されている。県内では大淀古墳群の3号墳で焼成前に底部を穿孔した壺形埴輪が出土している。

(2) 横穴墓

迫内遺跡では、横穴墓を2基検出した。1号横穴墓はすでに開口しており改変を受けており、天井部に工具痕が残存していた。玄室の天井はドーム形である。入り口付近に閉塞板の固定のための掘り込みとみられる溝や飾り縁とみられる段があるが、後世の改変が著しく詳細は不明である。

2号横穴墓の天井の形態は寄せ棟である。羨道は短く、玄室平面形は隅丸方形に近い。羨門部の形態は、正面形は長方形である。羨門部の閉塞は人頭大の石を使用しており、土砂が玄室内に流れ込んでおり完全には塞がれてはいない。床面には溝が羨門中央部を経て、前庭部まで延びている。床面には扁平な河原石を敷き詰め礫床としている。礫は、溝上部に蓋をする形で敷設されており、奥壁側には人頭大よりやや大きい長楕円の石が使用されている。

横穴墓の時期については、1号横穴墓については不明であるが、2号横穴墓は出土している遺物からTK43から隼上がりIまでの時期幅が考えられる。

(注)

(1) 「第4章 古墳文化の展開と首長墓の台頭」

(『宮崎県史 通史編原始・古代I』1997年、宮崎県)

第2節 中世の遺構と遺物

(1) 石塔群について

①五輪塔

迫内遺跡では、空風輪がA区で51基、B区で3基の合計54基と、火輪がA区で26基とB区で1基の合計27基、水輪がA区で17基、地輪がA区で41基出土した。完全な形での五輪塔は検出されず、ほとんどの地輪と水輪と地輪の組み合わせの数基が原位置に残っていた。五輪塔には紀年銘などの墨書も残っておらず、時代を特定することは困難である。以下、各部分ごとに分類を行っていきたい。

空風輪

空風輪では形態を中心として分類を行っている。空輪部の頂部の形態により尖頭型・圭頭型・円頭型・平頭型の4種類に分類し、さらに空輪の最大径によって細分類する。

I類：尖頭型 空輪側面は丸みをもち、頂部が尖っているもの

I—1 空輪最大径が中程よりやや下位にあるもの(1、8、9、12、14、34、51)

I—2 空輪最大径が中程にあるもの(2、6、7、10、21、22、26、32、36、45、47、48、50)

I—3 空輪最大径が中程より上位にあるもの(4、31、39)

II類：圭頭型 空輪側面は直線的で、頂部は尖り気味であるもの

II—1 空輪最大径が中程にあるもの(15)

II—2 空輪最大径が中程より上位にあるもの(19)

III類：円頭型 空輪側面は丸みをもち、頂部は丸いもの

III—1 空輪最大径が中程よりやや下位にあるもの(3、13、17、20、23、25、35、38、41、42、49)

III—2 空輪最大径が中程にあるもの(5、11、16、24)

III—3 空輪最大径が中程より上位にあるもの(37、43、44)

IV類：平頭型 空輪側面は直線的で、頂部が平らに近い

IV—1 空輪最大径が中程より上位にあるもの(29、33、40、46)

空風輪は、風輪基部が全て平底である点が特徴としてあげられる。分類から、空輪の頂部が尖頭型と円頭型のものが多いといえる。また尖頭型では空輪の最大径が中程にあるものが多く、円頭型では空輪の最大径が中程よりやや下位にあるものが多いといえる。その他の特徴として、2面に墨書が施されたもの(6)がみられ、相輪またはその形態に近いものが3点(18、27、30)みられた。

火輪

火輪では、形態と法量によって分類を行っている。まず柄孔の形態(円形・方形・無)と厚さで分類し、さらに反りの有無で細分類する。

I類 柄孔が円形であるもの

I—1 薄手であり、反りが有るもの(3)

I—2 薄手であり、反りが無いもの(4、5、6、9、10、13、22)

I—3 厚手であり、反りが有るもの(2、8、11、18、20、26)

I—4 厚手であり、反りが無いもの (1、12、19、21)

II類 柄孔が方形であるもの

II—1 薄手であり、反りが無いもの (7、14、17)

II—2 厚手であり、反りが無いもの (25)

III類 柄孔が無いもの

III—1 薄手であり、反りが無いもの (15)

III—2 厚手であり、反りが有るもの (16、23)

分類から、火輪は円形の柄孔をもつものが多いといえる。また円形の柄孔をもつ火輪は、薄手のものは反りが無いもの、厚手のものは反りがあるものが多いといえる。

水 輪

水輪は、地輪との組み合わせた状態で検出したものが14基 (セNoで表記) と原位置を動いているものが17基ある。水輪を納骨孔の形態 (円形・方形・無) と厚さで分類する。

I類 納骨孔が円形であるもの

I—1 薄手であるもの (セ1、14)

I—2 厚手であるもの (セ3、セ9、セ10、2、3、7、16)

II類 納骨孔が方形であるもの

II—1 薄手であるもの (セ13)

II—2 厚手であるもの (セ2、4、9)

III類 納骨孔が無いもの

III—1 薄手であるもの (セ5、セ7、セ11、セ14、5、10、13)

III—2 厚手であるもの (セ4、セ6、セ8、セ12、1、6、8、11、12、15、17)

水輪全体の特徴としては、最大径が中央付近にあることがあげられる。分類からは、納骨孔が無く厚手であるものが多いといえる。また、納骨孔があるものでも厚手のものが多いといえる。

地 輪

地輪は、水輪と組み合わせた状態で検出したものが14基 (セNoで表記) と他に40基ある。地輪は受部と呼ばれる彫り込みが全て無いことが特徴で、厚さのみで分類を行う。

I類 薄手であるもの (セ1～3、セ5、セ6、セ8～14、3、4、5、7～22、24～31、36、38～40)

II類 厚手であるもの (セ4、セ7、1、2、6、23、32～35、37)

分類から、地輪は圧倒的に薄手のものが多いといえる。IグループとIIグループの中心と考えられる大型地輪はいずれも厚手である。一般的に五輪塔は時代とともに小型化し、形式が固定化する傾向があることがいわれている。IIグループの33の下方からは蔵骨器として古瀬戸の瓶子が出土しており、その年代は13世紀末ぐらいとみられる。このことから大型地輪が石塔群のなかで最古のものと考えられる。

以上、五輪塔の各部分について分類を行ったが、紀年銘や墨書などが残っておらず、また地輪以外は原位置を保っていないため、五輪塔の時期を特定することは困難である。他県においては、紀年銘のある五輪塔の法量をもとに無銘の五輪塔の時期を特定する試みがなされている⁽¹⁾が、県内においてこうした研究は皆無に等しい。山内石塔群では、法量で以て時期特定の試みがなされているが、室町から江戸にかけての変動期（15世紀～17世紀）において多様化がみられるため、時期を特定することが難しいことを指摘している⁽²⁾。県内でも石塔群の発掘調査が行われるようになり、また宮崎市内の本勝寺境内にある妙円寺石塔群のように、現存する紀年銘のある五輪塔の調査⁽³⁾も行われている。今後こうした発掘調査や研究の進展、法量などのデータの蓄積によって、無銘の石塔群の時期特定が法量により可能となることを期待したい。

②板碑

迫内遺跡では、板碑を合計14本検出したが、ほとんどが上部を欠損し基部のみであった。折れてはいたが、完形のものも2本であった。いずれも凝灰岩製である。時代を特定できる紀年銘などもなく、時期を特定することはできない。板碑の配置は、石塔群の中心的人物の墓と考えられる大型地輪の近くまたは背後に位置し、それぞれ7本、5本の単位である。以下それぞれのグループごとに検討していきたい。

I グループの大型地輪の背後に位置する7本の板碑は、そのうちの2本が完形で残っており、復元を行った。形態は頂部が三角形で尖り、二条の線が彫られ、額と呼ばれる部分が突出している。塔身には墨書が残り、上部に主尊を梵字で窺書し、その下に偈頌、中央にそれぞれ「四七日」「七七日」と書かれている。板碑は死者・逆修追善供養のため板状の石で造った卒塔婆である⁽⁴⁾といわれることから、死者の四十九日の供養のために立てられたものである。この7本の板碑については掘り込み面から7本同時に立てられたとみられることから、当初「七本塔婆」と考えていた。しかし、完形の板碑を復元し配置したところ、「四七日」「七七日」の板碑の位置が問題となった（巻頭図版2）。そこで板碑をよく観察してみると、中央の板碑の基部の大きさが他の板碑よりも大きく、左右の3本の板碑の大きさがそれぞれほぼ同じであることから、七本塔婆でないという結論に至った。中央の板碑は中心的な板碑で、右側の3本は初七日の板碑と中陰の丁度真中の四七日の板碑、そして満中陰の七七日の板碑で、左側も同じく初七日の板碑、中陰の真中の四七日の板碑、そして満中陰の七七日の板碑という配置であった⁽⁵⁾と考えられる。地輪の配置は2基ないし3基の組み合わせが中心であるとみられることから、夫婦とその子（造立者）の追善供養または逆修供養⁽⁶⁾のために立てられたとみられる。また、近くから板碑の基部が新たに河原石の下から検出された。この板碑は上部が欠損しているのでその性格は不明であるが、掘り込み面から、当初この1本の板碑を立て、その後7本の板碑を立てたと考えられる。位置関係からみると、中心的な3基の大型地輪の背後に位置し、その3基の大型地輪の供養のためのものとみられる。

II グループの5本の板碑は、大きさをみると大型の板碑1本と同じ大きさのものが4本あるが、上部が全て欠損しているのでその性格などは不明である。この板碑も初七日から七五日の供養のためか、あるいは大型の板碑1本と2本ないし4本の板碑の組み合わせ（連碑）⁽⁷⁾と推定される。

中心となる3基の大型地輪の背後に位置しており、この3基の大型地輪の供養のためとみられる。

(2) 磨崖板碑と横穴状遺構について

磨崖板碑は、宮崎層群の岩盤にひな壇を造り出し板碑を7本彫っている。板碑の形状は、九州独特の形状といわれる上部が三角形で二条線の掘り込みが入り、額と呼ばれる部分が突出しているタイプである。風化のためか墨書などは確認できず、製作年代などは不明であるが、7本板碑が彫られていることから、「七本塔婆」とよばれるものであると考えられる。七本塔婆とは、人の死後初七日から七七日までの7回の供養のために立てられる塔婆のことで、塔婆の代わりに板碑が使用されている。現在でも人の死後四十九日までの七回の供養のために卒塔婆を7本立てたり、最初から7本一緒になっているものが使用されている⁽⁸⁾。

磨崖板碑は、県内では他の事例を確認できないが、国富町の本庄石仏には、現在は倒れている大きな岩に仁王像が浮き彫りになっており、その岩には五輪塔が浮き彫りされている。また、野尻町の東麓磨崖仏では梵字が岩に刻まれている。県外では、福島県と山形県、大分県と鹿児島県に磨崖板碑が確認されている⁽⁹⁾。特に福島県の観音山磨崖供養塔とよばれる断崖に彫られた板碑群は、迫内遺跡で検出した磨崖板碑に非常に類似している⁽¹⁰⁾。また鹿児島県の清水磨崖仏群でも形状の似ている磨崖板碑を確認した⁽¹¹⁾。

横穴状の遺構は、位置的なこと、入り口の前面から河原石・五輪塔の一部が検出されたことから、磨崖板碑と一体的な性格のものと考えられる。当初は、「やぐら」⁽¹²⁾と同一のものと考えられたが、田代郁夫氏により「やぐら」と呼ばれる性格のものではないとの指摘がされた。大分県南海部郡弥生町上小倉にある磨崖石塔群では、岩盤に40基の大小の五輪塔や宝塔が刻まれ、塔面や壁面には非常に多くの穴（龕）が掘られている。また、発掘調査により原位置より1m下で中世の遺物の包含層が確認され、当時は石塔群が仰ぎ見る高位に彫られていたことが明らかになった⁽¹³⁾。他にも五輪塔の彫られた壁面に龕とみられる穴が掘られているものも確認される⁽¹⁴⁾。これらのことから、磨崖板碑と横穴状の遺構は同時期のもので一体的なものであることが考えられる。壁面に刻まれた「伊倉」については、現在のところ不明であるが、地名とすると宮崎県内では2カ所確認できる。1カ所は佐土原町の伊倉地区、もう1カ所は新富町の伊倉地区である。『角川日本地名大辞典 宮崎県』⁽¹⁵⁾によると、新富町の伊倉は戦国期に井蔵とみえる。佐土原町の那珂にも伊倉という地名があり、永正十八年（1521）の板碑と年代不明の板碑が現存しており⁽¹⁶⁾、近くには平等寺という寺院跡がある。伊東氏との関連の深い寺院といわれているが、廃仏毀釈で廃寺となり史料なども残っていないので明確なことは不明である⁽¹⁷⁾。現存する板碑の形状が、迫内遺跡で復元したものに類似しており何らかの関連が考えられる。

これらの磨崖板碑と横穴状の遺構の性格について2つの意見がある。1つは、惣供養塔とよばれる石塔群（墓地）全体の供養をするための施設であるという意見である⁽¹⁸⁾。もう1つは、四十九日の供養をするための施設で、横穴状の遺構は死体を安置した施設もしくはモガリの場であるという意見である⁽¹⁹⁾。どの意見も参考になるが、同じような類例が他にないことから現段階では結論は出していない。

(3) 掘立柱建物跡

迫内遺跡では、掘立柱建物を合計9軒検出したが、中世のものとみられるB区で検出した4軒の掘立柱建物跡について検討していきたい。

SB1～SB3は、磨崖板碑の正面に位置している。また、遺物も包含層から土師器の坏や小皿が出土しており、陶磁器類はほとんど出土していない。このことから当時の人々が生活する日常的な場ではなく、祭祀や葬送などの非日常的な場であると考えられる。これらのことからSB1～SB3は磨崖板碑に関連する施設と考えられる。

SB4・5は、石塔群に向かい合う位置にあり、基壇部と思われる造成面には、礫などの造成土に土師器の坏や皿の破片が混ざっており、数十cm程の厚さに堆積していた。また、数回にわたって建て直されていることもピットの位置と数から明らかである。ここでも陶磁器類はほとんど出土しておらず、造成面から白磁の瓶の底部（16世紀代、中国産）が1点出土したのみで、土師器の坏と皿（主に小皿）がほとんどを占める。これらのことから時期については不明であるが、石塔群に関連する施設であることから石塔群が営まれていた時期のもので、祭祀や供養などを行う施設と考えられる。

(4) 出土遺物について

① 蔵骨器及び和鏡

石塔群からは蔵骨器3点と副葬品とみられる和鏡が1面出土した。いずれもⅡグループから出土している。これらの出土品は数量的にはわずかであるが、石塔群の年代を決める1つの手がかりにはなると思われる。以下、蔵骨器の瓶子と茶釜、副葬品の和鏡について検討していく。

蔵骨器として出土した瓶子は、瀬戸産で13世紀後半代のもと考えられる⁽²⁰⁾。ただ、瓶子は日常生活容器であり、蔵骨器専用容器ではないことより、ある程度の使用期間が想定される。その期間としては、およそ四半世紀から半世紀、長くて1世紀とみられ⁽²¹⁾、底部の穿孔もみられない⁽²²⁾ことから、13世紀末から14世紀前半にかけて蔵骨器として使用されたものと考えられる。

蔵骨器として出土した鋳物の茶釜は、出土した茶釜の数が少なく研究なども皆無に等しく、時期を特定することは困難である。一般に茶釜の使用は15世紀頃から茶の湯の盛行とともに広がり、九州では福岡県の芦屋釜が有名である。発掘調査で出土した古いものとしては14世紀半ば頃の茶釜と鋳型が確認されている⁽²³⁾。茶釜も伝世品とみられることから、蔵骨器に転用するまでの使用期間を考えなければならない。

副葬品とみられる和鏡は、文様鋳出しが浅く、既存の鏡を用いてその反転型をとる踏み返し技法で製作されている。現存する平安時代から鎌倉時代のものに似た和鏡があり、また踏み返し技法は12世紀以降みられない⁽²⁴⁾ことから、時期は平安時代末から鎌倉時代（11世紀末～12世紀）とみられる。ただ、室町時代に各地に鋳物師が定着し始め在地で工房が開かれるようになると、例外的に踏み返し製法も行われていたことが指摘されている⁽²⁵⁾。

②土師器

土師器は包含層から出土したものがほとんどであり、輸入陶磁器など共伴する遺物は出土していない。法量的には、坏は口径が12~13cmのものが多く、皿は口径が7~9cmのかわらけと呼ばれる小皿が多い。底部切り離し技法はほとんどが糸切りである。ただ、石塔群から1点ヘラ切りとみられる皿が出土している。土師器の編年は宮崎県においては進んでいないのが現状であり、時期を特定できない。九州南部の中世土器の組成として、坏と小皿のセットで出土することが多いことが特色としてあげられており、こうした出土例は12世紀代から16世紀代までみられるという指摘がある⁽²⁶⁾。また、宮崎県において糸切りが初現するのは12世紀中頃であるとされる。出土した土師器は石塔群を営んだ人々の使用したものであり、時期を特定することによって石塔群やそれに関連する施設などの性格も明らかになると思われるが、土師器の形態分類、時期比定については、関連する資料の不足で十分に検討することができなかった。今後の資料の増加や研究の成果に待ちたい。

(5) まとめ 一 迫内石塔群に関する二・三の考察一

最後に、迫内遺跡の石塔群全般について若干の考察を行っていく。まず石塔群の年代について検討していきたい。先に述べたように五輪塔や板碑には紀年銘などがなく、時期を特定することができない。出土した遺物からは大まかに13世紀後半から16世紀の時代と考えられる。中世墓地の開始は平安時代末~鎌倉時代初期⁽²⁷⁾とみられ、墓の造営は貴族や武士団、有力な農民層や僧侶が行っていた。その中でも武士団などは数代(数百年)の間一族の墓を造営している。こうした墓地は、九州では東国出身の御家人などが入部した後に造営されるようになったと考えられる⁽²⁸⁾。迫内遺跡の五輪塔の大きさをみると大型のものから小型のものまで様々であり、このことから数百年にわたって墓地が営まれていたと考えられる。こうした墓地では、惣領とよばれる一族の中心となる人物がその両親の墓(夫婦墓)と自分の墓を造立し、追善供養や逆修供養を行っていたとみられる。その墓を中心に子孫の墓が形成され、数百年の間墓地が造営されていったとみられる⁽²⁹⁾。迫内遺跡では、ほとんど2基ないし3基の単位の組み合わせが多く、特に大型地輪が3基の単位で組み合わせられ、それぞれの中心の墓と考えられることから、こうしたタイプの墓地であるとみられる。では、迫内遺跡の石塔群を営んだ人々はどういう人々であったのだろうか。

迫内遺跡の位置する宮崎市の富吉地区には、小字として樽水があり、ここを本拠に中世では在地勢力として垂水氏が活躍したといわれる。垂水氏は土持氏の一族とされ、土持氏は九州の古代の大族日下部氏に代わって中世の日向で有力な在地領主となったといわれる⁽³⁰⁾。土持氏は宇佐八幡の神人として豊後から移ってきており、文治年間の変動期に日向国内での有力な在地領主として台頭してきたといわれる⁽³¹⁾。この土持氏の一族に垂水氏がおり、秀栄(土持四郎)を祖とする⁽³²⁾。垂水氏は早くから伊東氏の家臣となっており、中世においては富吉地区や近くの生目地区には伊東氏の勢力が強かった⁽³³⁾。その伊東氏も元龜三年(1572)木崎原で島津氏に敗れて以後勢力が弱まり、天正五年(1577)に豊後に逃れ、島津氏が日向国内を支配するようになる。石塔群もその頃に廃棄されたとみられる。史料的に確認できるのは、三代秀道で延元二年(1337)後醍醐天皇五宮から「日向国柏原別府並村角別府」を兵糧料所として預けられている⁽³⁴⁾。また観応元年(1350)畠山直顕から

「穆佐院富吉名」の田地を宛行れている⁽³⁵⁾。このことから14世紀には同地に勢力を持っていたとみられる。富吉地区には富吉神社があり、創建年代は不明であるが宇佐八幡宮を祭神としており宇佐八幡宮との関係も考えられる。断片的ではあるが、このことから迫内遺跡の石塔群の造営者は土持氏の一族である垂水氏が有力であると考えられる。

最後に古墳と石塔群のセットについて検討していきたい。中世では、墓地が設定される時には、その地が何らかの意味で霊地であることが必要であり、そうでない場合は霊地になす必要があった⁽³⁶⁾。そのために古い墓地や古墳がその墓の核とされた⁽³⁷⁾。迫内遺跡でも古墳と横穴墓が確認されており、この地が何らかの意味で当時神聖視または特別視されていたとみられ、こうした場に墓地が形成されたとみられる。

(注)

- (1) 磯部淳一「群馬県における五輪塔の編年」(『高崎市史研究』2、1992年)
- (2) 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第1集』1984年、宮崎県教育委員会
- (3) 甲斐常興『調査報告 妙圓寺とその石造物』1985年
- (4) 『岩波仏教辞典』1989年、岩波書店
- (5) 田代氏のご教示による。
- (6) 追善供養とは、善事を修し、供養を施して死者の冥福を祈る行為をいい、逆修供養とは、生前から死後の菩提を祈って仏事を行うことをいう。(『岩波佛教辞典』より)
- (7) 連碑とは、双式板碑ともいわれる。特殊形板碑で別石の二基で一对をなすもの、また一基を二分したり三分したりしたものがある。(播磨定男『中世の板碑文化』より)
- (8) 藤澤氏のご教示による。
- (9) 播磨定男『中世の板碑文化』1989年、東京美術。村橋英三編『日本の石仏9 東北編』図書刊行会。
坂詰秀一編『板碑の総合研究2 地域編』1983年、柏書房
- (10) 村橋英三編『日本の石仏9 東北編』。
堀江格「中通り地方の板碑と供養」(大石直正・川崎利夫編『中世奥羽と板碑の世界』2001年、高志書院)
- (11) 川辺町教育委員会「清水磨崖仏群」(『川辺町文化財調査報告書(4)』1997年)
- (12) 「やぐら」とは、中世に納骨や供養を目的とするため、山腹に掘り込まれた岩穴のことである。鎌倉を取り巻く丘陵にはきわめて多く存在するが、鎌倉を離れるとその分布は粗となり、地域的特色を持つ。(『日本史大辞典』平凡社より)
- (13) 小田富士雄「豊後・南海部郡の磨崖石塔群」(『九州考古学研究 歴史時代篇』1977年、學生社)
- (14) 『大分県文化財調査報告書』第1集、1953年、大分県教育委員会。望月友善『大分の石造美術』1975年、木耳社。
- (15) 1986年、角川書店。
- (16) 佐土原町史編纂委員会『佐土原町史』1982年。
- (17) 前掲注(15)。『宮崎県の地名』(『日本歴史地名大系46』1997年、平凡社)
- (18) 吉井敏幸氏、藤澤氏のご教示による。
- (19) 田代氏のご教示による。

- (20) 藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」(瀬戸市埋蔵文化財センター『研究紀要第5輯』1997年)
- (21) 藤澤良祐「埋納された古瀬戸製品—特に大型壺・瓶類を中心として—」
(瀬戸市歴史民俗資料館『研究紀要XⅧ』2001年)
- (22) 前提注(21)
- (23) 五十川伸也「中世の銅釜」(『歴史民俗博物館研究報告』第71集、1997年)
- (24) 久保智康「鋳型からみた鏡作りの歴史」(『日本の美術』No394〈中世・近世の鏡〉1999年、至文堂)
- (25) 前提注(24)
- (26) 岡本武憲「九州南部」(『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年)
- (27) 藤澤典彦「中世墓地ノート」(『佛教藝術』182号、1987年)
- (28) 藤澤氏のご教示による。
- (29) 前提注(27)。
吉井敏幸「大和地方における惣墓の実態と変遷」(『中世社会と墳墓—考古学と中世史研究3—』1993年、名著出版)
- (30) 「武家社会の成立期の日向国」(『宮崎県史 通史編中世』1998年)
- (31) 前提注(30)
- (32) 永井哲雄「土持文書」覚書—「日向古文書集成」所収土持文書について—(『宮崎県史研究』第4号、1990年)
- (33) 若山浩章「金石文の語る日向国の中世」(『宮崎県史 通史編中世』1998年)
- (34) 「伊東文書」第2号(『宮崎県史 史料編中世2』)
- (35) 「伊東文書」第6号(『宮崎県史 史料編中世2』)
- (36) 前掲注(27)
- (37) 前掲注(27)

図版 1



遺跡全景



D区 1号古墳〈西から〉



D区 2号・3号古墳〈垂直〉

図版 2



発掘調査前の状況（1）



発掘調査前の状況（2）



A区 石塔群検出状況



A区 作業状況（1）

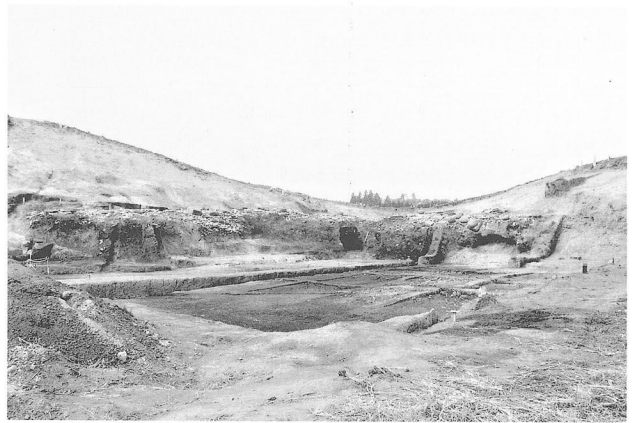


A区 作業状況（2）

図版 3



A区 石塔群全景 (1)



A区 石塔群全景 (2)



A区 石塔群全景 (3) 〈東から〉



A区 Iaグループ

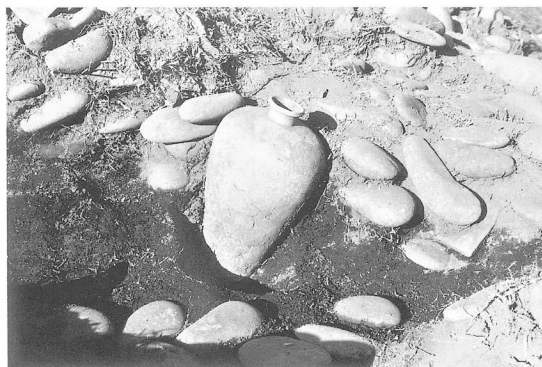


A区 IIaグループ

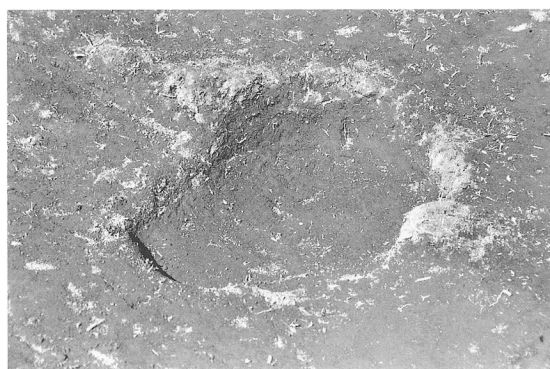
図版 4



A区 蔵骨器出土状況 (1)



A区 蔵骨器出土状況 (2)



A区 1号土坑完掘状況



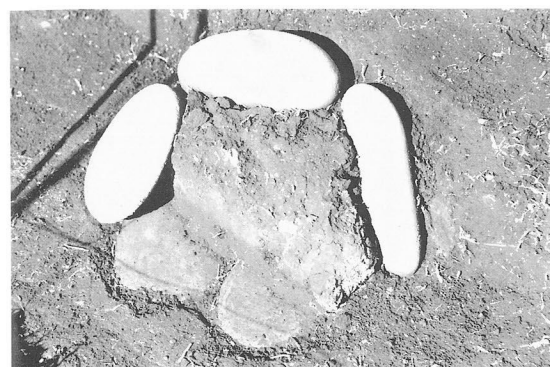
A区 茶釜出土状況 (1)



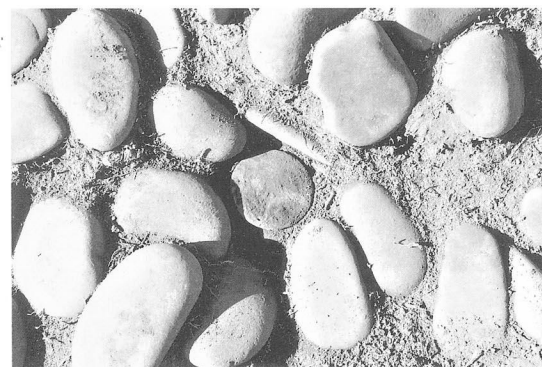
A区 茶釜出土状況 (2)



A区 石製蔵骨器検出状況



A区 石組み蔵骨器検出状況



A区 和鏡出土状況

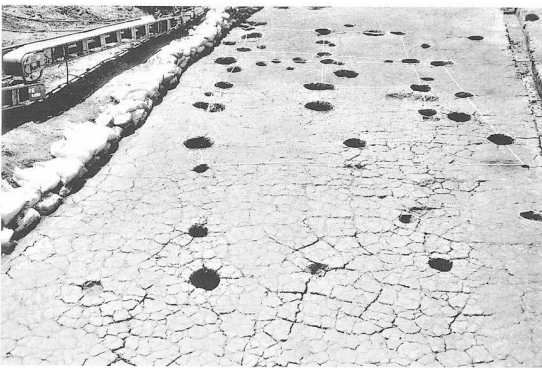
図版 5



B I 区 完掘状況



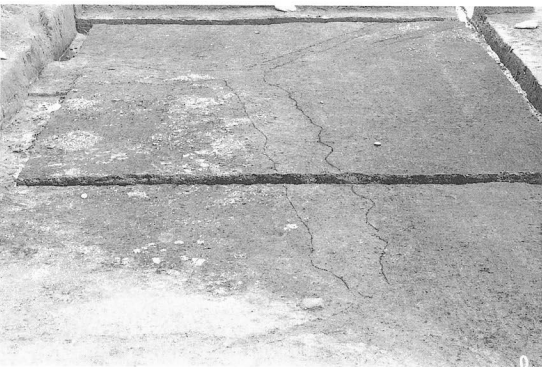
B 区 S B 1 完掘状況



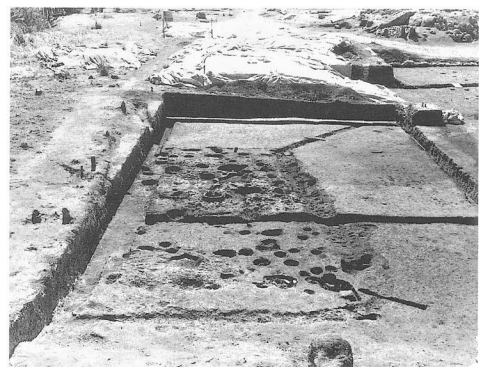
B 区 S B 2・3 完掘状況



B 区 S B 4・5 検出状況 (1)



B 区 S B 4・5 検出状況 (2)

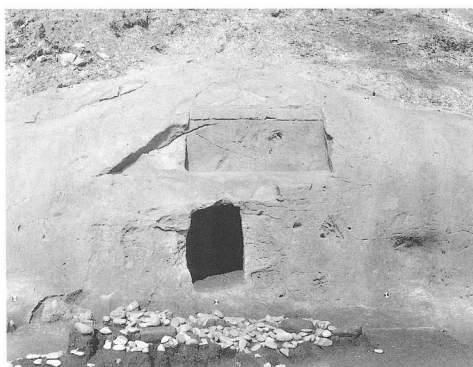


B 区 S B 4・5 完掘状況

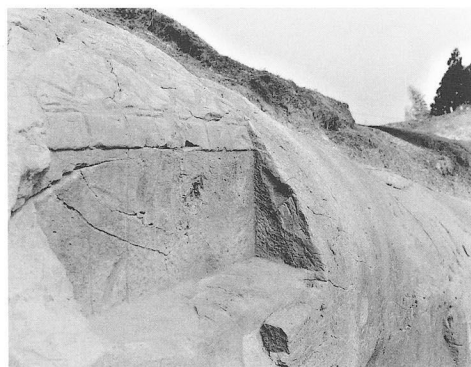


B 区 磨崖板碑全景〈南から〉

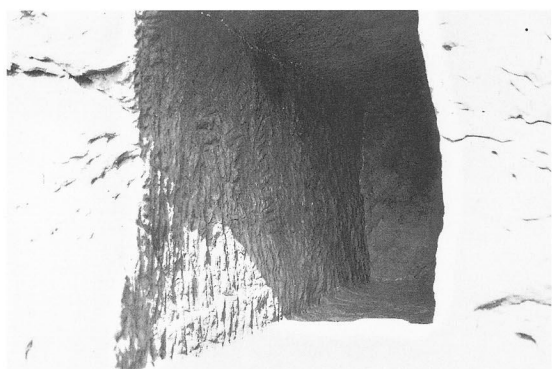
図版 6



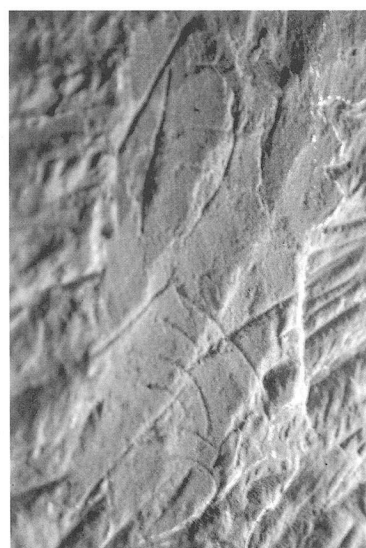
B区 磨崖板碑と横穴状遺構



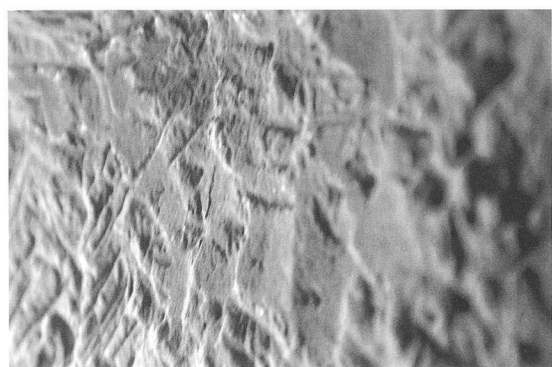
B区 磨崖板碑



B区 横穴状遺構



B区 横穴状遺構壁面の陰刻文字



B区 横穴状遺構壁面の工具痕

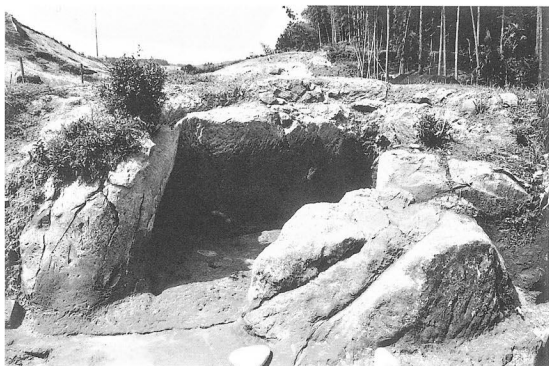


C区 溝状遺構検出状況



C区 掘り込み状遺構検出状況

図版 7



C区 掘り込み状遺構完掘状況<南から>



D区 発掘調査前の状況(1)<東から>



D区 発掘調査前の状況(2)<南から>



D区 1号古墳全景<東から>



D区 1号古墳1号周溝内
遺物出土状況



D区 1号古墳遺物出土状況(1)

图版 8



D区 1号古墳遺物出土状況(2)



D区 1号古墳遺物出土状況(3)



D区 1号古墳土器埋設土坑(1)



D区 1号古墳土器埋設土坑(2)



D区 1号古墳土器埋設土坑(3)



D区 1号古墳土器埋設土坑(4)

図版9



D区 1号古墳土器埋設土坑完掘状況(1)



完掘状況(2)



完掘状況(3)



完掘状況(4)



完掘状況(5)



D区 2号・3号古墳全景(西から)

図版10



D区 2号・3号古墳土層断面ベルト(1)



ベルト(2)



ベルト(3)



出土状況(2)



出土状況(3)



D区 2号古墳2号周溝内
遺物出土状況(1)

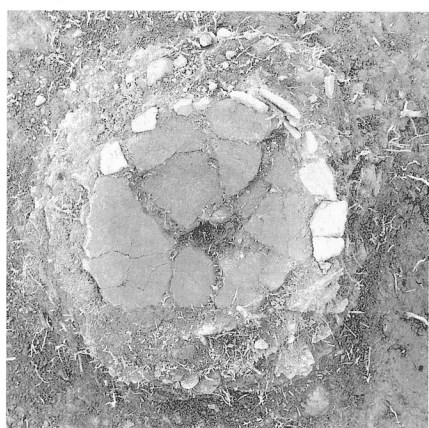


出土状況(4)

図版11



出土状況 (5)



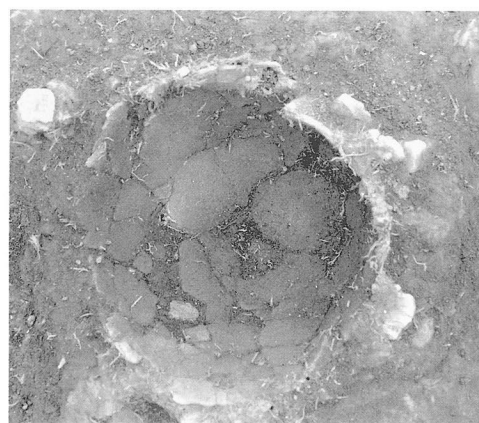
遺物出土状況 (1)



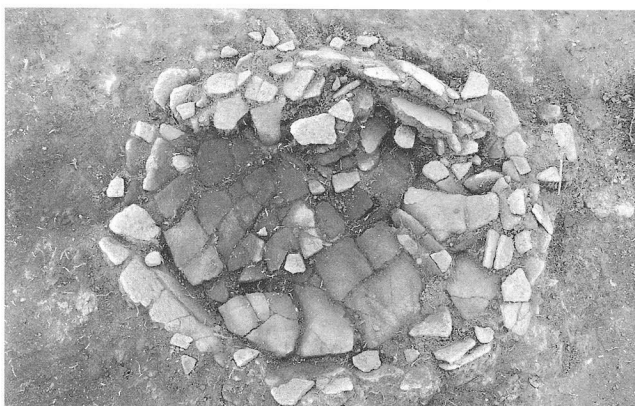
遺物出土状況 (2)



遺物出土状況 (3)



遺物出土状況 (4)



遺物出土状況 (5)



遺物出土状況 (6)

図版12



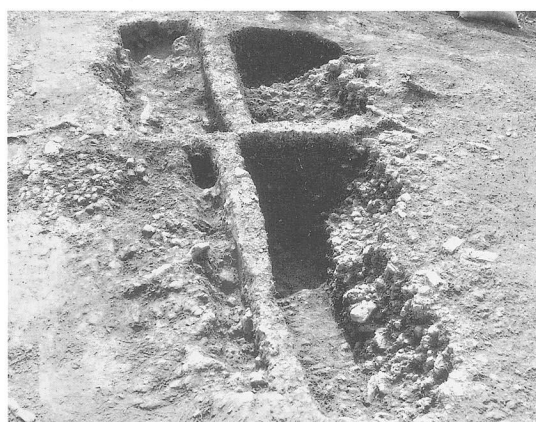
D区 2号古墳2号周溝内
遺物完掘状況(1)



完掘状況(2)



D区 2号古墳主体部検出状況



D区 2号古墳主体部掘り下げ状況



D区 2号古墳主体部完掘状況



D区 3号周溝完掘状況

図版13



D区 3号古墳主体部上遺物出土状況



D区 3号古墳主体部内剣出土状況 (1)



D区 3号古墳主体部内剣出土状況 (2)



D区 3号古墳3号周溝内遺物出土状況 (1)



D区 3号古墳主体部完掘状況



D区 3号古墳3号周溝内遺物出土状況 (2)

図版14



3号周溝内遺物出土状況（3）



3号周溝内遺物出土状況（4）



3号周溝完掘状況（南から）



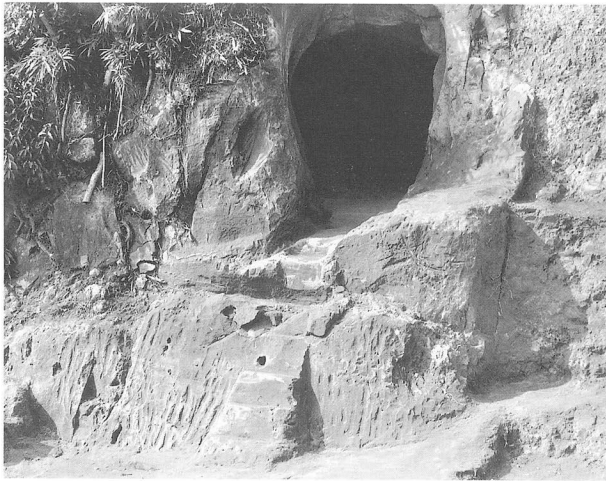
3号周溝完掘状況（西から）



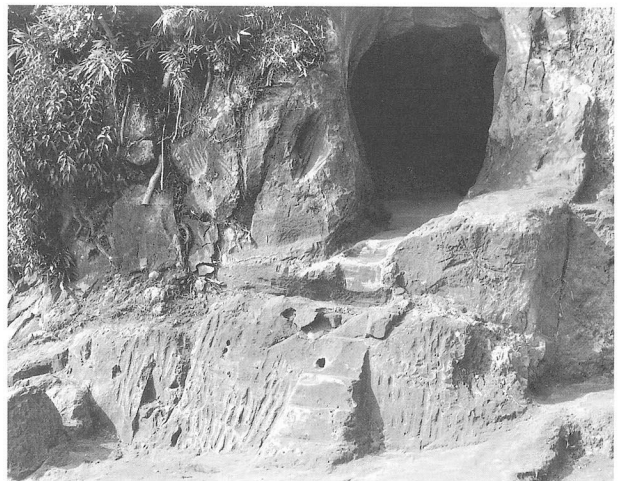
D区 1号横穴墓調査前の状況（1）



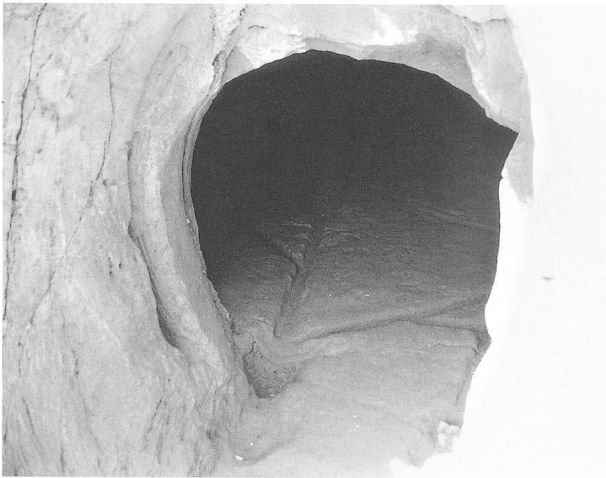
調査前の状況（2）



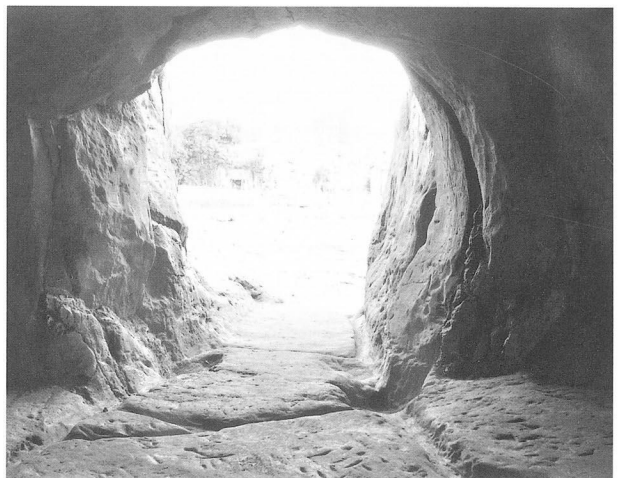
D区 1号横穴墓完掘状況(1)



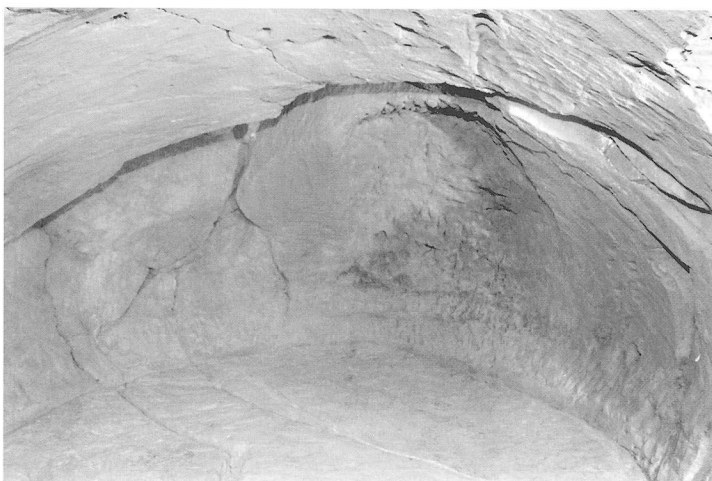
1号横穴墓完掘状況(2)



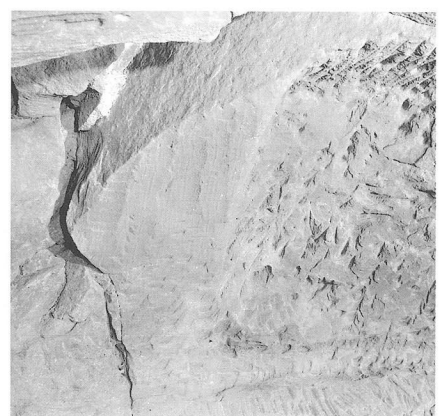
1号横穴墓羨門



玄室内から羨門を望む



玄室内



壁面に残る工具痕